

41839

教科書文庫

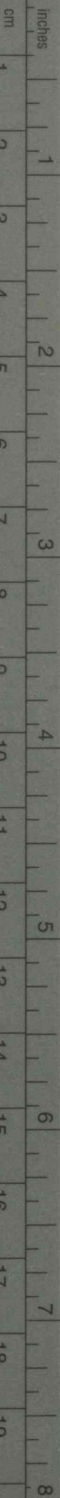
4
815
41-1927
2000 38331

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

教科書文庫
4
815
41-1927
2000038331

永井一孝編

新撰國文法全

東京女子書院發行



資料室

3759
No.7

教科書文庫
4
815
41-1927
2000038331

永井一孝編

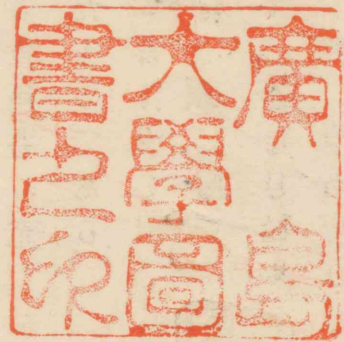
新撰國文法 全

東京斯文書院發行

昭和二年二月十七日
文部省檢定濟
中學校國語科用

広島大学図書
2000038331





緒言

- 一 本書は中學校及び之と同程度の中等學校に於ける國文法の教科書に充てんが爲に、その教授要目に準據して編纂したものである。
- 一 本書は成るべく煩瑣な理論を避け、平易簡明を主として容易に國文法の一般的知識を會得せしめんことに努めた。不必要な分類や異説を避けたことは言ふまでもなく、術語も最も普通なのに従つた。
- 一 國文法中生徒の最も誤り易い助動詞の意義用法、動詞・形容詞と助動詞、助動詞の相互の接續、助詞の意義用法等は、特に意を用ひて説明を加へた。
- 一 文例は成るべく國語讀本から採り、殊に文學的趣味の饒か

なものを選び、生徒の實生活に緊密ならしめると同時に、文法教授をして興味多からしめんことに努めた。

一 本書は就中練習に重きを置いて、成るべくその機會を多からしめた。いはば本文の説明はノオト代りともいふべき程度に止め、専ら練習によつて、その知識を確實ならしめようと企圖したのである。故に、問題中には、その章に於いて學んだ事項のみに止めず、まゝ既修の事項を加へ、正誤問題には誤りなきものをも交へた。練習問題は要するに本書の最も意を用ひたものである。

大正十五年九月

著者識す

新撰國文法目次

總 說

第一篇 單語概說

第一章	品	詞	三
第二章	名	詞	四
第三章	代名	詞	六
第四章	動	詞	一〇
第五章	形容	詞	一四
第六章	副	詞	一八
第七章	助	詞	三

第八章	助動詞	二四
第九章	接續詞	二六
第十章	感動詞	三〇
第十一章	九品詞	三一
第十二章	單語の構成	三三
第十三章	品詞の轉成	三五

第一篇 單語各説

第一章	用言の活用	三九
第二章	動詞の活用	四一
〔一〕	四段活用	四一
〔二〕	上二段活用 下二段活用	四三
〔三〕	上一段活用 下一段活用	四六
〔四〕	加行變格活用	五四

〔五〕	佐行變格活用	五五
〔六〕	奈行變格活用	五八
〔七〕	良行變格活用	五九
第三章	動詞の活用形	六四
第四章	形容詞の活用及び活用形	七三
第五章	音便	八一
第六章	助動詞の種類	八六
第七章	助動詞の活用	九〇
第八章	助動詞の接續法	九六
第九章	助詞の用法	一〇五
〔一〕	と	一〇五
〔二〕	に へ	一〇七
〔三〕	ば	一〇八
〔四〕	とも ども	一〇九
〔五〕	や か	一一三

〔六〕	な	……………	一三	
〔七〕	だに	すら さへ	一五	
〔八〕	ばや	なむ	一六	
〔九〕	その他の助詞	……………	一六	
第十章	連	語	……………	一九

第三篇 文

第一章 文の成分

〔一〕	主語	述語	文主語	……………	二四
-----	----	----	-----	-------	----

〔二〕	補	語	……………	二九
-----	---	---	-------	----

〔三〕	修	飾	語	……………	三四
-----	---	---	---	-------	----

第二章 文の構造上の種類

〔一〕	單	文	……………	四一
-----	---	---	-------	----

〔二〕	複	文	……………	四二
-----	---	---	-------	----

〔三〕	重	文	……………	四四
-----	---	---	-------	----

第三章	文の呼應附係結	……………	四八
-----	---------	-------	----

附 録

文法上許容ニ關スル事項

表

第一表	動詞活用表
-----	-------

第二表	形容詞活用表
-----	--------

第三表	形容動詞活用表
-----	---------

第四表	助動詞活用表
-----	--------

新撰國文法目次終



新撰國文法

永井一孝編

總說

(文章)

(一) 花 咲く。
 (二) 月 鏡の如く明かなり。
 (三) 父母の思は 山よりも高く海よりも深い。
 右の例は何れも「何が」ドウシタ」といふ二つの部分から成つて、ある一つの纏まつた思想をあらはしてゐる。かゝるものを文又は文章といふ。

總說

單語

設問

(一) 花 咲く。
 (二) 月 鏡 の 如く 明かなり。
 (三) 父 母 の 恩 は 山 より も 高く 海 よ
 り も 深い。
 文を段々分解して行くと、右の例の如く、ある意味を持つた
 一つ一つの語とすることが出来る。かゝるものを單語と
 いふ。

設問 我々が普通にはゆる文とはどんなものを指すか。

第一篇 單語概説

第一章 品詞

單語は、その數が非常に多いけれども、これをその形や役目
 の上から見て、次の九種に分類する。

名詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 助詞 助動詞
 接續詞 感動詞

そして、これらの一つ一つを品詞といふ。あらゆる單語は、
 どれかの品詞に屬する。

練習

次の文を單語に分解せよ。

- 一 山青く浦霞む。千里みな春なり。

品詞

練習一

- 二 如意岳より吹きくる春風は、軽く余の袖を拂ひ、行方は遠く堤の柳の糸にあり。
- 三 雀、雀、おやどはどこだ。
- 四 赤松の林をあとに、麻島ひだりに見つゝ、汽車はいま堤にかゝる。
- 五 白い砂に青い松、廣い海に滑る船、さながら一幅の大和繪。

第二章 名詞

- (一) 正成尊氏を討つ。
- (二) 富士山は駿河にある。
- (三) 庭に櫻の木ありて景色よし。
- (四) 旅に病んで夢は枯野を駈けめぐる。
- (五) 儉約と吝嗇とはちがふ。

右の文例の中、傍線を施した語は、何れも物事の名をあらは

名詞

してゐる。かやうに、物事の名をあらはす單語をすべて名詞といふ。

〔注意〕 (一) 一 二 五つ 七匹 八錢 半ダース

(二) 第一 三代目 第五號

右の例にあげた語のやうに物事の數量や順序をあらはす語もやはり名詞である。

練習

練習二

次の文の中から名詞を見出せ。

- 一 花の雲、鐘は上野か浅草か。
- 二 松島、巖島、天橋立は日本三景と稱へられてゐる。
- 三 華麗、優美、雄大の三つの趣を兼ね備へた風景は富士山である。
- 四 春は命なり、萬物皆活きて動く。春は愛なり、天地共に笑ふ。
- 五 春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。

- 六 春を飾るものは、第一に花なり、第二に鶯、雲雀なり、第三に霞なり。
- 七 磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮き立つ雲、いづれか造化の妙筆に漏れん。
- 八 海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、そもく畫か。
- 九 趣味は人の嗜好なり、見識なり、思想なり、氣品なり、性情なり。
- 一〇 徳川時代の文學は、國文學の中の花である。浪華から江戸へ、元祿から文化、文政へ、藝術の花は移り移つて千紫萬紅の色を見せた。

第三章 代名詞

- (一) 彼と我とは親友なり。
- (二) お前の親友は誰か。
- (三) これは何の繪ぞ。

代名詞

設問

(四) そこよりもここの方がよい。

(五) 彼方 此方にさまよふ。

右の文例の中、傍線を施した語は、何れも名詞の代りに用ひられてゐる。かやうに、名詞の代りに用ひられる單語をすべて代名詞といふ。

設問

- 一 人に關する代名詞をあげよ。
 - 二 物事場所・方角に關する代名詞をあげよ。
- 〔注意〕 わが家 この本 どの方面 などいふ場合の「が」「の」は別の品詞である。従つて、代名詞は「わ」「こ」「ど」である。

練習

次の文の中から代名詞を見出せ。

- 一 かなたの森、こなたの村、いづれも一眸の中に收まる。
- 二 その神社、この寺院、その由緒を聞けば、何れも過ぎし世をしのぶ種ならぬはなし。

練習三

體言

復習一

名詞・代名詞を總稱して體言といふ。

復習

次の文の中から體言を見出せ。

- 三 予に良友あり。彼等は皆名士大家にして、何れも偉業を成したる者なり。予若し其の助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る。
- 四 わつしよい、わつしよい。わつしよい、わつしよい。わつしよい。あの聲どこだ。あの笛何だ。あつちも祭だ、こつちも祭だ。そら揉め、揉め、揉め。わつしよい、わつしよい。
- 五 こゝは南門の跡、そこは金堂の跡、かしこは法華堂の跡、見廻せば、何處も懷舊の種ならぬは無し。
- 六 雀の子、そのけ、そのけ、お馬が通る。
- 七 「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひてゆく。」聞召せ、背負ひまつるは奴わが主と頼む乃木將軍の愛兒なり。」

- 一 春日暖くして、梅花一庭に薫ず。小猫縁にうづくまり、少女二人追羽子を突く。
- 二 我等は月雪花に對して、古來の文學を味ひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出来る。
- 三 カンテラから黒い油煙が立つてゐる。その間を村の者、町の者が數十人駈廻つてわめいてゐる。色々の野菜が彼方此方に積んで並べてある。これが小さな野菜市である。
- 四 四十二の齡は、重盛に於て決して短きものにあらざりき。平家の興るや、彼實にその樞軸たり。平家の榮ゆるや、彼實にその柱石たり。彼の一生は、その父清盛と共に平家史の大半を語るものなりき。
- 五 黄昏一犁の雨、入相の鐘を傳へて、十里の長堤、春漸く老いんとす。知らず、江上の漁翁網し得たる白魚と落花といづれか多き。

第四章 動詞

動詞

- ⊖
- (一) 書を讀み字を書く。
 - (二) 笑ふ門には福來る。
 - (三) 猿も木から落ちる。
 - (四) 雨降り風吹く。
 - (五) 庭に一本の柿の木あり。
- 右の文例の中、傍線を施した語は、何れも物事の動作又は存在をあらはしてゐる。かやうに、物事の動作又は存在をあらはす單語をすべて動詞といふ。
- ⊕
- (一) 書を讀まず。
 - (二) 書を讀みたり。
 - (三) 書を讀む。
-
- (一) 風吹かむ。
 - (二) 風吹きすさぶ。
 - (三) 風吹く。

(四) 書を讀め。

右の例に示したやうに、「讀む」といふ動詞はその用ひ方によつて「讀マ」「讀ミ」「讀ム」「讀メ」と形が變り、「吹ク」といふ動詞は「吹カ」「吹キ」「吹ク」「吹ケ」と變る。これらの外に、又

(四) 風吹け。

ぎ	き	て
ぐ	く	つ
ぐる	ぐる	つる
ぐれ	くれ	つれ

のやうに變るものもあり、

月を見む。

鞠を蹴たり。

月を見る。

鞠を蹴る。

月を見れど飽かず。

鞠を蹴れば高く飛ぶ

のやうに變るものもあり、

死^シ

な
に
ぬ
ぬ
ぬ
ぬ
ね

のやうに變るものなどもある。かやうに、動詞はすべてその用ひ方によつて形の變る性質をもつてゐる。その變り方には種々あるけれども、要するに五十音圖の縦の一行の中において變るものである。

〔注意〕動詞の形の變り方は、文語と口語とで異なるものがある。

練習四

練習

一 次の文の中から動詞を見出せ。

(イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ) (ヘ) (ト) (チ) (リ) (ヌ)

(イ) 山の櫻は咲き、野の草は萌ゆ。
 春の霜半ば消えて、日影はや庭にあり。
 山吹こぼれて、春の水淺黄に流る。
 歲月は人を待たずと言ふ。
 夜はふける、月はいよ／＼澄む。
 秋の風は泣くなり。冬の風は怒るなり。春の風は笑ふなり。
 春の風の吹く所、そこに淡雪消えて若草萌え、谷川の氷とけて波の花まづ咲く。

(ト) 東寺の塔は我を迎へて立ち、鴨川の水は我を待ちて歌ふ。
 一もとの柳の垂れたるかげに、床几並べて團子を賣る。腰かけて煙ふく客あり。

(チ) お山の大将 おれひとり、あとから來るもの つきおとせ、ころげて落ちて またのぼる、赤い夕日の 丘の上。

(ヌ) 二 次の動詞は五十音圖のどの行においてどう形が變るか。
 眠る 行く 遊ぶ 許す 打つ 睨む 思ふ 脱ぐ 盡く 受

く 撫ぶ 尋ぬ 射る 居る^キ 放送す 媚ぶ

第五章 形容詞

⊖ 高き山聳ゆ。

(一) 美しい花が咲いた。

(二) 今日は甚だ暖し。

(三) 白い旗が見える。

(四) 病すこぶる重し。

右の文例の中、傍線を施した語は、何れも物事の性質・状態等をあらはしてゐる。かやうに物事の性質・状態等をあらはす單語をすべて形容詞といふ。

⊕ (一) 山高く聳ゆ。

(一) 花美しく咲く。

形容詞

(二) 山高し。

(三) 高き山。

(四) 山高けれど眺望わるし。

(二) 花美し。

(三) 美しき花。

(四) 花美しけれど見る人もなし。

右の例に示したやうに、「高し」といふ形容詞はその用ひ方によつて「高ク」「高シ」「高キ」「高ケレ」と形が變り、「美し」といふ形容詞は「美シク」「美シ」「美シキ」「美シケレ」と變る。かやうに形容詞はすべてク・シ・キ・ケレ又はシク・シキ・シケレと形の變る性質をもつてゐる。これを五十音圖に照らして見ると、

〔か〕 き く 〔け〕 〔こ〕
〔さ〕 し 〔す〕 〔せ〕 〔そ〕

又は、
〔か〕 シきシく 〔け〕 〔こ〕

の如く五十音圖の力行・サ行の二行に跨つて形が變るのである。

〔注意〕 口語では、「シ」キは「イ」となり、「シキ」は「シイ」となる。又、「ク」「シク」が「ウ」「シウ」となることもある。

練習五

練習

一 次の文の中から形容詞を見出せ。

- (イ) 果物ほど味の高く清きものは無し。
- (ロ) 杏は乾からびて賤しく、李は水多くしてあさはかなり。
- (ハ) 枇杷はうまけれど、種子大きく肉少きは飽かぬ心地す。
- (ニ) 高い山に登ると、遠い川や近い村が見えて、景色がよい。
- (ホ) 松青く、樓門赤く、茶煙たえぐに上りて、花極めて白し。
- (ヘ) 時は暮れゆく春よりぞ、また短きは無かるらん。恨は友の別より、更に長きは無かるらん。

用言

復習二

動詞・形容詞を總稱して用言といふ。

復習

次の文の中から用言を見出せ。

- (イ) あゝ、同じく人といふ、高く清く美しく貴きこと斯の如き者もあるか。

二 次の形容詞は用ひ方によつて形がどう變るか。

- 優し 苦し 神々し 樂し 香し 痒し 甘し 深し 珍し 廣し

- (ト) 嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶ひ出すのはボチの事だ。
- (チ) 常に良き著述に親しむ者は、只ひとり居れども寂しきを覺えず。
- (リ) 天地の大なるを思ひ、時の窮りなきを思へば、人間一身の經驗の狭く、淺く小さく且つ少なきは、言ふに及ばぬことなり。
- (ス) 春の月の光は幼き童の髮の如し。めでたきことはめでたし、なつかしきこともなつかし。されど、なほ聊か物足らぬ心地す。

- (ロ) 我が國は、四季の變遷をそれ／＼に趣變りて珍しく、春は花秋は紅葉の樂しき眺いづも盡きず。
- (ハ) 山は青く、水は清くして、山には早蕨を摘み齒をあさる樂あり、川には釣を垂れ網をうつ興も多し。
- (ニ) 螢が屢、眼前に現れては消える。岸の眞菰に這ひ上つては、つるりと水の上に滑り落ちるものもある。目前の闇を、大きい柔かい曲線を描いて鷹揚に飛ぶものもある。
- (ホ) 初島わたり漕ぐふなうたの寄る浪ごとに聞ゆるもゆかしく、魚見が崎のこなたより渚を傳ひて、砂白く松青きはとり、濱千鳥の群れ飛ぶ様もいとをかし。

第六章 副詞

- ⊖ (一) 月漸く出づ。
- (二) 犬が頻りに吠える。

副詞

- (三) 病すこぶる重し。
- (四) 彼の鼻は随分高い。

右の文例の中、傍線を施した語は、何れもそれ／＼下の動詞・形容詞の意味を限定してゐる。かやうに、動詞・形容詞などの上にあつて、その意味を限定する單語をすべて副詞といふ。

〔注意〕 副詞は、動詞・形容詞のみならず、時として他の副詞や名詞・代名詞・語句・文などの意味を限定することもある。

- (一) 最も静かに講義をきゝたり。
- (二) たつた五錢しか無い。
- (三) 私はすぐそこへ行つてまゐります。
- (四) かれは眞に良友なり。
- (五) 恐らく彼は余を欺きしならん。

⊖ 副詞は、多くの場合は、限定される語のすぐ上にあるが、時として、

(一) 堅く出入を禁ず。

(二) 少しも失望の様子が見えない。

のやうに、語句を隔ててあることもある。

〔注意〕 副詞には、本来のもの、外、他の品詞から轉成したものが多い。

練習六

練習

一 次の文の中から副詞を見出して、且つどの語を限定してゐるかを言へ。

(イ) 風は益、烈しく、波は愈、高し。

(ロ) 一面の芝生が見る目遙かに打續く。

(ハ) 將來を思へば轉、寒心に堪へず。

(ニ) 淡靄かすかに山の裾を罩めて、空の匂いと深し。

(ホ) 菜の花氷に映りて、物洗ふ女もおのづから風情を添へたり。

(ヘ) 夏の短夜が明けると、もう荷車が通り始める。

(ト) 入日の影は雲にのみ残りて、月いまだ上らず。田子の浦曲の夕風に、千鳥の聲もいと稀なり。

(チ) 夜來の密雲いつしか全く霽れ、星斗闌干として光を放ち、殘月淡く西にあり。

(リ) 味方の艇はどうも滑り出しがよくなかつた。「ゆつくり」と整調が叫んだ。自分は更に大きくどなつて、それを全艇に傳へた。皆の調子がやつと合つて來た。

(ヌ) 眼を上げると、いつしか日は没して、富士から相豆の連山は、入日のあとの卵色の空に、印度藍の波をうねらして、まだはつきりと輪廓を見せてゐるが、つい其處の葉山、返子の山々は、已に夕靄がかゝつた。

二 次の副詞を用ひて各短文を作れ。

蓋し 忽ち 専ら 豈に 曾て 徐ろに ひたすら 畢竟

ひらくと がたくと

三 次の文中の傍線を施した語の品詞は何か。

- (イ) 帽子を軽く打つ。
- (ロ) 帽子を軽く作る。
- (ハ) 餅をかたく焼く。
- (ニ) 城をかたく守る。

第七章 助詞

- (一) 文法の試験を行ふ。
- (二) 電報で呼ぶことにした。
- (三) 風吹かば寒からん。
- (四) 如何に努力すとも甲斐なからん。
- (五) 汝ゆめく怠るな。
- (六) そんなに面白いかね。

助詞
(テニヲハ)

右の文例の中、傍線を施した語は、何れも種々の語句に附屬して用ひられてゐる。そして、その中で、「の」「を」「で」「に」はそれ／＼語句と語句との關係をあらはし、「は」「と」もは語句と語句を接續し、「な」「か」「ね」はそれ／＼種々の意味を添へてゐる。かやうに、種々の語句に附屬して、或は語句と語句との關係をあらはし或は語句と語句とを接續し或はその語句に種々の意味を添へる單語をすべて助詞又はテニヲハといふ。

〔注意〕 助詞も助動詞も他の語に附屬することは同じだが、助動詞は大抵形が變るが、助詞は一切變らぬ点が異なる。

練習

次の文の中から助詞を見出せ。

- 一 瘦蛙負けるな一茶こゝにあり。

練習七

- 二 こゝに來て遊べや親のない雀。
- 三 渚の松に吹く風をいみじき樂と我はきく。
- 四 垂れかゝる花は少女の手にて捕へられたり。
- 五 這へ笑へ二つになるぞ今朝からは。
- 六 色は匂へど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ、有爲の奥山けふ越えて、淺き夢見じ酔ひもせず。
- 七 世の學問に志す人を見るに、とかく低いところを経ないで、すぐに高いところへ登らうとする弊がある。それでは低いところにはさへ届くことはできない。

第八章 助動詞

- ⊖ (一) 雨いまだ止まず。
- (二) 影も形も見えない。

助動詞

- (三) 美しき花咲きたり。

右の文例の中、「ず」「ない」「たり」はいづれも動詞の下について、その動詞のあらはす動作に種々の意味を附け加へてゐるかやうに動詞の下についてその動詞のあらはす動作に種々の意味を附け加へる語を助動詞といふ。

〔注意〕 助動詞は、又體言形容詞又は他の助動詞や助詞に添ふものもある。

- (一) 君は君たり、臣は臣たり。
- (二) 無事に家に歸りたるが嬉しきなり。
- (三) 日夜奔走せしめられたり。
- (四) 美しき事玉の如し。

⊖ 助動詞は、單獨には用ひられないで、いつも他の語に附屬し、且つ大抵はその用ひ方によつて形が變る。今、その主要なるものをあぐれば、次のやうなのがある。

る(レル)	犬に噛ま(レ)る
らる(ラレル)	母に妨げ(ラ)れる
す(セル)	水を飲ま(セ)る
さす(サセル)	鼠を捕へ(サ)せる
しむ	字を書かしむ
ず(ヌイ)	す(ナイ)
ざり(ナカツ)	降(ナカツ)タ
じ	降(ナカツ)タ
む(ヨウ)	降(ヨウ)タ
きけり(タ)	降(タ)タ
ぬたり(タ)	降(タ)タ

練習八

練習

次の文の中から助動詞を見出せ。

- 一 井の中の蛙大海を知らず。
- 二 精神一到何事か成らざらむ。
- 三 勤儉は家を興す基なり。
- 四 飢ゑたる者は食を擇ばず。
- 五 波の上に白き鳥の遊べるあり。
- 六 蒔かぬ種は生えぬ。
- 七 下男に命じて門を閉ぢしむ。

たし(タイ)	行き(タイ)
べし	知る(べし)
まじ(マイ)	なり(なり)
なり(タリ)	たり(タリ)
ごとし	光陰は矢のごとし

- 八 良賈は深く藏めて虚しきが如し。
- 九 秋來ぬと目にさや豆の太りかな。
- 一〇 群れ飛ぶ鷗落花の風に飄るに似たり。
- 一一 自分の呼吸の外うき世の物音は何も聞えない。
- 一二 侯がうつかり出ようものなら、ボチは何處まででもついてくる。
- 一三 けたゝましき汽笛の響、いざたなき耳を驚かす。
- 一四 諸君は頗る春秋に富めり。徐ろに大成せむことを期すべし。
- 一五 今日雨も降るまい。風も吹くまい。

第九章 接續詞

- (一) 鉛筆及び紙を買ひたり。
- (二) 霞か雲か將た雪か。
- (三) 徒歩にするか、或は車にするか。

接續詞

練習九

(四) 空は曇れり、されど雨は降るまじ。
 右の文例の中、傍線を施した語は、何れも上下の語句又は文を接續してゐる。かやうに、上下の語句又は文を接續する單語をすべて接續詞といふ。

練習

次の文の中から接續詞を見出せ。

- 一 余は學問もしくは藝術にて身を立てんと欲す。
- 二 頼山陽は詩文を以て名あり、然れどもその心を用ひたるは經濟の學なりき。
- 三 「安心し給へ。勝利は僕等のものだ。」と久野は答へた。併し久野自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。
- 四 志立たざれば、學ぶこと成熟せず。故に古人も志立つは學の半ばなりといへり。
- 五 江戸は日本一の都會として、珍品奇什こゝに集まれば、書籍も亦求め

易し。されば、生活の豊かなるに安んじて、圖書を蒐集し、訓話考證に専らなる學者も少からず。

第十章 感動詞

- (一) あゝ悲しいかな。
- (二) そら火事だ。
- (三) いざ打ちつれて野に出でん。
- (四) さあ其の譯をお話しなさい。
- (五) やよ待ち給へ、太郎殿。

右の文例の中、傍線を施した語は、何れも物事に感動した時自然に發する語である。かやうに、物事に感動した時自然に發する語をすべて感動詞といふ。

感動詞

練習一〇

練習

次の文の中から感動詞を見出せ。

- 一 あらたふと青葉若葉の日の光。
- 二 あゝ人生は夢か幻か。
- 三 秋くれて冬來り、小笹が末に霞たばしる。あはれ飄零の我が身にも似たるかな。
- 四 おや終列車が出てしまつた。さて、困つた事になつた。こりやまあどうしたらよからう。
- 五 やよ孫兵衛近う寄れ、汝を男と見て頼みたきことあり。
- 六 山紫に水青う、大和は歌によい處、行けば行く程花が散る。あれ又寺では鐘が鳴る。

第十一章 九品詞

あらゆる單語は、名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・助詞・助動詞・接續詞・感動詞の九品詞の何れかに屬する。九品詞の中、名詞・代名詞即ち体言と動詞・形容詞即ち用言とは、文の本幹として用ひられ、その他の品詞は、或は他の語に副うて用ひられ、或は他の語に附屬して用ひられるものである。

練習一

練習

次の文中傍線のある語の品詞をいへ。

あ、樂しき夏休は來れり。行李の細は既にしめて、俥だに來らば今にも家に歸り得るほどに用意整ひし人もあらん。樂しきは夏休にこそ。歸れ。飛ぶが如くに歸れ。野越え山越え將た海を越えて歸れ。歸りて父母の家に心緩かにして夏を過ごせ。

第十二章 單語の構成

複合語

○ 單語の中には、二つ以上の單語が結びついて更に一つの複合語となつたものがある。例へば、

人々 われく なれくし 時々 おやく 朝
日 遠淺 櫻狩 請取 近寄る 物語る 名高し
有りがたし 誠に 少しも しかのみならず

の如きは、何れも複合語であるが、皆それぞれ一つの單語と見るべきである。

○ 又、單語の中には、
さ夜 み山 うひ陣 た走る か弱し け高し も
の寂し

などの如く、單獨では役に立たぬ語が上について、それと複

接頭語

合して出来てゐるものもある。かやうに、獨立しないで或語の上についてゐる「さ」「み」「うひ」などの如き語を接頭語といふ。

◎ 又、單語の中には、

友どち 奴ばら 厚み 悲しげ 春めく 黄ばむ
男らし 夜すがら

などの如く、單獨では役に立たぬ語が下について、それと複合して出来てゐるものもある。かやうに、獨立しないで或語の下についてゐる「どち」「ばら」「み」などの如き語を接尾語といふ。

接尾語

練習一二

練習

次の文中から接頭語、接尾語を有する語を見出して、その品詞を述べよ。

- 一 五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されてゐる。

轉成の名詞

單語は、その用ひ方によつて、或品詞から轉じて他の品詞になることがある。

(一) 轉成の名詞

右の例は動詞から轉成した名詞である。

光 ヒカリ 戦 タケカヒ 氷 コホリ 教 オシヘ 謠 ウタヒ 狙 ネラヒ 思 オモヒ
白 シロ 黒 クロ 赤 アカ

右の例は形容詞から轉成した名詞である。

第十三章 品詞の轉成

- 二 更けゆくまゝに、燈火の影などうら淋しく、眠られず。
- 三 今も松虫の聲きけば、やがて其の折思ひ出でられて物悲し。
- 四 秋らしくなりて、いと露けし。
- 五 ちい君、そんなに大人ぶるな。もつと學生らしくし給へ。

轉成の代名詞

あはれ、悲しき運命かな。
あはれを知る。
前の文の「あはれ」は感動詞、後の文のは名詞である。

(二) 轉成の代名詞

君に忠を盡すは臣の道なり。
君の郷里はどこですか。

前の文の「君」は名詞、後の文のは代名詞である。「小生」「僕」「閣下」「足下」などいふ代名詞も名詞から轉じたのである。

轉成の副詞

(三) 轉成の副詞

七百年の昔を懷ふ。
昔、男ありけり。
前の文の「昔」は名詞、後の文のは副詞である。
一圓餘りました。(動詞)

轉成の接續詞

それは餘りひどい。(副詞)
風烈しく波荒し。(形容詞)
風烈しく吹く。(副詞)
副詞には動詞、形容詞から轉成したものが多し。

(四) 轉成の接續詞

風光明かなる處なり。(名詞)
寒さ厳しく候處如何御暮らし遊ばされ候か。(接續詞)
父に從ひて日光に遊ぶ。(動詞)
余は長男なり。從ひて責任重し。(接續詞)
學んで時に之を習ふ、亦悦ばしからずや。(副詞)
山また山を越えゆく。(接續詞)

練習一三

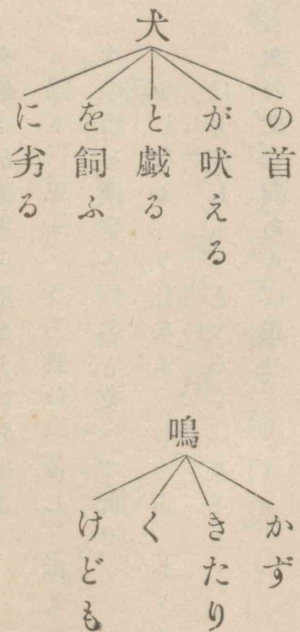
練習

次の文中の傍線を施した語の品詞を問ふ。

- 一 名詞及び代名詞を体言といふ。
- 二 その信徒殆ど千名に及びたり。
- 三 國亂れて良相を思ふ。
- 四 國家の亂れを如何せん。
- 五 股引もすでに破れたり。
- 六 股引の破れをつくろふ。
- 七 今日甚だ樂しく暮らしたり。
- 八 昔の事を樂しく語り合はん。
- 九 あはれ、太閤世を去りて、世つぎの主は幼し。
- 一〇 あはれを告ぐる遠寺の鐘かすかにきこゆ。

第二篇 單語各説

第一章 用言の活用



右の例に示したやうに、體言は形が變らぬが、用言は其の用ひ方によつていろいろに形が變る。かやうに、用言の形が變ることを活用といふ。そして、その變らぬ部分を語根といひ、變る部分を語尾といふ。

活用
語根
語尾

〔注意〕 漢字と假名と交へて用言を記すには、語根を漢字であらはし、語尾を假名であらはすことを大体原則とする。故に「働く」を「働らく」と書き「受くる」を「受る」と書けば誤である。

練習一

練習

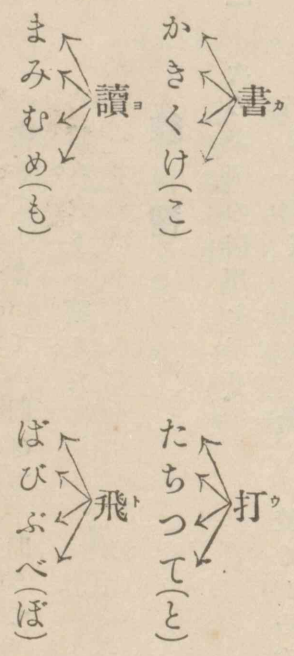
- 一 次の語を語根と語尾とに分けよ。
歸る 思ふ うち眺む 苦し 涼し 溺る 買ふ 勇まし
- 二 次の語を漢字と假名と交へて記せ。
やしなふ うしなふ おもふ おどろく うつくし
ほどばしる とどろく おもし
- 三 次の文に誤あらば正せ。

その男は鈍い眼を二三度しばたゝいては、四邊の眠むさうな風景を見廻しながら、俯向たまゝ黙々と歩いて行く。擦れちがふ人が寒むさうな顔をびりつとさせて彼の身体に投げる訝かしげな眼も、瘦た犬がくん／＼鳴ながら彼の後からついてくるのも、彼の神經を微塵も惹きつけなかつた。

第二章 動詞の活用

動詞はすべて五十音圖の縦の一行において活用するが、その活用の形式は必ずしも一樣ではない。この点から動詞を分類すると、文語では九種、口語では五種になる。

〔一〕 四段活用



右の例に示したやうに、五十音圖のアイウエの四段に亘つて活用する動詞を四段活用の動詞といふ。

〔注意〕 四段活用の動詞は、口語も文語と同じである。たゞ口語ではイ段がイ・ウ・ツンなどに變ることが多い。

書いて―書いて 問ひて―問うて 勝ちて―勝つて
読みたり―讀んだ

練習二

練習

一 次の動詞の活用を示せ。

行く 聞く 泣く 驚く 焚く 防ぐ 急ぐ 泳ぐ 話す 殺す
返す 促す 勝つ 保つ 穿つ 放つ 思ふ 舞ふ 行ふ
失ふ 言ふ 祝ふ 養ふ 償ふ 飛ぶ 浮ぶ 叫ぶ 擇ぶ 飲む
住む 望む 憎む 好む 歸る 降る 眠る 鳴る 滯る
剃る 削る

二 四段活用に屬する動詞は、五十音圖の中のどの行にあつて、どの行にはなきか。

三 次の文の中から四段活用の動詞を見出して、その活用を示せ。

上二段活用

(一)

上二段活用

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)(ト)(チ)(リ)(ヌ)

問ふは一度の恥。
歲月は人を待たず。
雨を冒して奈良に遊ぶ。
犬も歩けば棒に當る。
朱に交れば赤くなる。
花笑ひ鳥歌ひ人樂しむ。
言はぬは言ふにまさる。
飛んで火に入る夏の虫。
敵軍戦ひ且つ退きたり。
天を仰いで歎いた。

〔二〕 上二段活用 下二段活用

起⁺

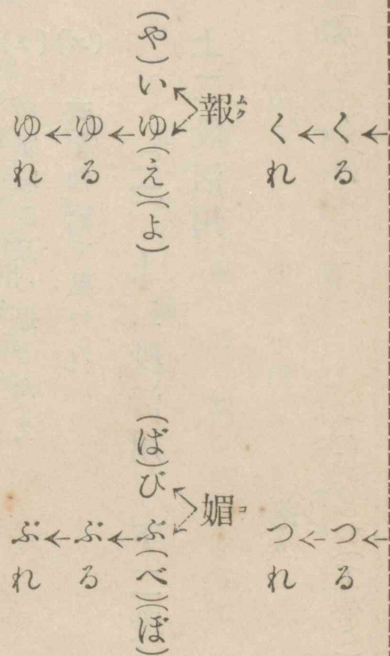
(か)きく(け)(こ)

落⁺

(た)ちつ(て)(と)

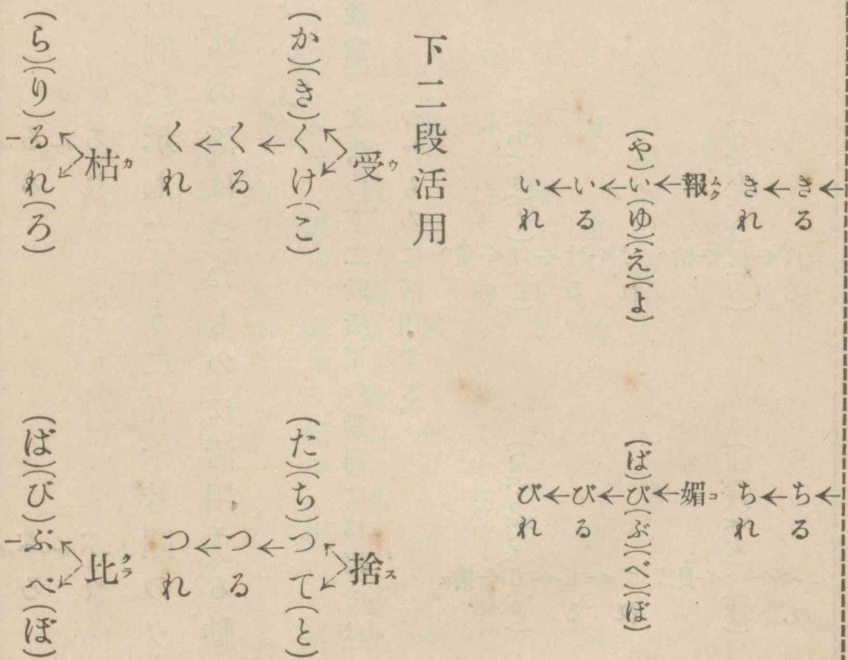
右の例に示したやうに、五十音圖のイ・ウの二段及びびウ段に「る」「れ」の添はつたものに活用する動詞を上二段活用の動詞といふ。

〔注意〕 文語の上二段活用の動詞は、口語では、イ段及びびそれに「る」「れ」の添はつたものに活用する。



下二段活用

(二) 下二段活用



右の例に示したやうに、五十音圖のウエの二段及びウ段に「る」「れ」の添はつたものに活用する動詞を下二段活用の動詞といふ。

る←る←
れ

ぶ←ぶ←
れ

〔注意〕 文語の下二段活用の動詞は、口語では、エ段及びそれの「る」「れ」の添はつたものに活用する。

受←
け←け←
り←り←
枯←
る←る←
る

捨←
て←て←
り←り←
比←
る←る←
る

練習三

練習

一 次の動詞の活用を示せ。

(イ) 盡く 生く 過ぐ 朽つ 恥づ 閉づ 強ふ 亡ぶ 恨む 老

ゆ 悔ゆ 下る 懲る

(ロ) 得 授く 助く 設く 妨ぐ 告ぐ 投ぐ 載す 馳す 寄す

棄つ 企つ 撫づ 奏づ 詣づ 尋ぬ 兼ぬ 重ぬ 數ふ 考

ふ 備ふ 與ふ 教ふ 述ぶ 始む 求む 定む 認む 消ゆ

見ゆ 榮ゆ 絶ゆ 覺ゆ 燃ゆ 吠ゆ 恐る 溺る 倒る 植

う 飢う 据う

二 上二段活用下二段活用に屬する動詞は、五十音圖のどの行にあつて、どの行にはなきか。

三 次の文の中から上二段活用下二段活用の動詞を見出して、その活用を示せ。

れ←
れ

べ←
れ

上一段活用

(一)

上一段活用

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)(ト)(チ)(リ)(ス)

教ふるは學ぶの半なり。
 峰高うして攀ち登ること困難なり。
 その慘狀見るに忍びず。
 汝に出づるものは汝にかへる。
 かの時の恥辱は今も忘れず。
 九分は足り、十分は溢る。
 孝子は人に譽めらる。
 富士山最も高く聳ゆ。
 光陰矢の如くに過ぎたり。
 今にして改めずば必ず悔ゆべし。

〔三〕 上一段活用 下一段活用

(着る)

(か)き(く)け(こ)

(見る)

(ま)み(む)め(も)

下一段活用

設問

(二)

下一段活用

(蹴る)

右の例に示したやうに、五十音圖のイ段及びそれに「る」「れ」の添はつたものに活用する動詞を**上一段活用**の動詞といふ。

〔注意〕 この活用に屬する動詞は、文語では、次の數語だけである。

カ行 着る ナ行 似る 煮る ハ行 干る マ行 見る
 ヤ行 射る 鑄る ヲ行 居る 牽る

設問 右の動詞の活用を示せ。

〔注意〕 文語の上一段活用の動詞は、口語でもやはり同じ上一段活用だが、口語では、これらの外に文語の上二段活用の動詞が悉くこれに屬する。

(か) (き) (く) (け) (こ)

ける
けれ

右の例に示したやうに、五十音圖のエ段及びそれに「る」「れ」の添はつたものに活用する動詞を下一段活用の動詞といふ。

〔注意〕 この活用に屬する動詞は「蹴る」の一語だけである。

〔注意〕 「蹴る」は口語でもやはり下一段活用であるが、口語では更に文語の下一段活用の動詞が悉くこれに屬する。

練習四

練習

次の文の中から上一段活用下一段活用の動詞を見出して其の活用を示せ。

- 一 群れ飛ぶ鷗落花の風に飄るに似たり。
- 二 彼は巧に鳥を射たり。

正格活用

復習一

四段活用上二段活用下一段活用上一段活用下一段活用を
總稱して正格活用といふ

復習

- 一 次の文の中から正格活用の動詞を見出して活用の行と種類をいへ。
(イ) 見渡せば眺むれば見れば須磨の秋。
(ロ) 約束を違ふる時は信用を失ふべし。

(ハ) (ニ) 深夜の月が白く冴えてゐる。
 山を下りて野に出ると、日は彼方の森に沈んで、夕煙が遠近の村々に立上る。

(ホ) 石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。

前に残照流るゝ川あり、後に青芦さや／＼と戦げり。

往來の角で話してゐる人々が、どつと何事をか笑ふ。

國を治むる本は家を齊ふるにあり。

勝つて兜の緒を締めよ。

飢ゑたる者は食を擇ばず。

二 次の文に誤あらば正せ。

(イ) 車に乗つて行こう。

(ロ) 言わぬは言うにまさる。

(ハ) 大砲を鑄りて砲臺に据ゆ。

(ニ) 老ひては子に従う。

(ホ) 稻は夏植ゑて秋收める。

(ヘ) (ト) (チ) (リ) (ヌ) (ル) (ヲ) (カ) (ヨ) (タ) (レ) (ツ)

彼はよく人を使い又これを教ゆ。

過は必ず悔ひ改めよ。恩は必ず酬ひよ。

落武者薄の穂に怖ず。

恥なきを恥づれば恥なし。

峰高くして攀じがたし。

人を射らんと欲せば先づ馬を射よ。

困難に堪える習慣を養なふ。

浴客殆ど絶ふる時なし。

友達の眼は皆勝利に輝ゐている。

そよ／＼と涼しい風が吹いている。一面に生へている薄が其の

度ごとに頭を前に曲げる。

春とゆうと私は房州へ行つた時のことを思い浮かべる。

教うるは學ぶの半ばなりと古の人も言いたり。

糧食悉く盡きる時、これ城中の將士の亡ばん日なり。

用 加行變格活

〔四〕 加行變格活用

(來^ッ)

(か)きく(け)こ

くる

くれ

右の例に示したやうに、「來^ッ」といふ動詞は、五十音圖のイ・ウ・オの三段及びウ段に、「れ」の添はつたものに活用する。これが若しオ段の活用を持たなかつたら、上二段活用に屬するのだが、その点が一種特別であるから、これを加行變格活用の動詞といふ。加行變格活用に屬する動詞は、「來」の一語だけである。

〔注意〕「來」は、口語でもやはり加行變格だが、口語では

(か)きく(け)こ

くる

くれ

のやうに、「く」の活用がなくなるから、文を終止する時「くる」を用ひる。

文語 白浪寄せ來^ッ。

口語 白浪が寄せて來る。

〔五〕 佐行變格活用

(爲^ヌ)

(さ)しすせ(そ)

する

すれ

右の例に示したやうに、「爲^ヌ」といふ動詞は、五十音圖のイ・ウ・エの三段及びウ段に、「れ」の添はつたものに活用する。これが若しイ段の活用を持たなかつたら、下二段活用に屬し、エ

用 佐行變格活

段の活用を持たなかつたら、上二段活用に屬するのだが、この兩活用を兼ねたやうに一種特別に活用するから、これを佐行變格活用の動詞といふ。佐行變格活用に屬する動詞は、本來は「爲」の一語だけであるが、更に「爲」は名詞・形容詞・副詞等と複合して佐行變格活用になす事が多い。

- 罪す 位す 半す 發す 論ず 主張す 放送す
- スケツチす 全うす 正しうす 重んず 明かにす
- 審かにす 欲す 與す

〔注意〕 文語の佐行變格活用の動詞は、口語でもやはり佐行變格だが、口語では、

(た)し(す)せ(と)

する
すれ

練習五

のやうに「す」の活用がなくなるから、文を終止する時「する」を用ひる。
文語 勉強す。
口語 勉強する。

練習

一 次の文中の傍線を施した動詞は何活用に屬するか。

- (イ) (ロ) (ハ) (ニ) 秋來りて風涼し。
- (イ) (ロ) (ハ) (ニ) 都の空にも秋は來たり。
- (イ) (ロ) (ハ) (ニ) 何事にも爲せば成る。
- (イ) (ロ) (ハ) (ニ) 勉強だにせば畏るゝに足らず。

二 次の文中の傍線を施した語の讀方を問ふ。

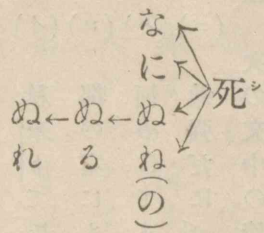
- (イ) 夏去りて秋來る。
- (ロ) 夏が去つて秋が來る。
- (ハ) 我も我もと馳せ來る。
- (ニ) 我も我もと馳せ來る兵士。

用 奈行變格活

三 次の動詞の活用を示せ。

- 譯す 博す 祝す 愛す 勘辨す 判斷す 休息す 否定す
- 計畫す 囁す 辱うす 徐ろにす

〔六〕 奈行變格活用



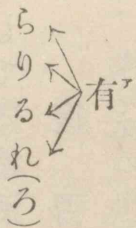
右の例に示したやうに、「死ぬ」といふ動詞は、五十音圖の「ア・イ・ウ・エ」の四段に活用することは四段活用と同じだが、更にウ段に「る」「れ」の添はつたものに活用する点が一種特別であるから、これを奈行變格活用の動詞といふ。奈行變格活用に屬する動詞は、「死ぬ」の外に、「往ぬ」といふ語が一つあるが、現

用 良行變格活

代文にはあまり用ひられない。

〔注意〕「死ぬ」といふ動詞は口語では四段活用である。

〔七〕 良行變格活用



右の例に示したやうに、「有り」といふ動詞は、五十音圖の「ア・イ・ウ・エ」の四段に活用することは全く四段活用と同じだが、ただ文を終止する時に、

我に一人の弟あり。

のやうに、イ段の音を以てする点が、四段活用の動詞と異なつて一種特別であるから、これを良行變格活用の動詞といふ。良行變格活用に屬する動詞は、「有り」の他に「居り」「侍り」

の二語あるが、侍りは現代文では用ひられない。

〔注意〕文語の良行變格活用は、口語では四段活用になつてゐる。

練習六

練習

一 次の動詞は何活用に屬するか。

死す 死ぬ 居り 居る

二 良行四段活用と良行變格活用とは何處が異なるか。

加行變格活用、佐行變格活用、奈行變格活用、良行變格活用を
總稱して變格活用といふ。

復習二

復習

一 次の文の中から變格活用の動詞を見出して活用の種類をいへ。

- (イ) やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲。
- (ロ) 彼は凜然たる意氣を有せり。
- (ハ) 敗軍の將は兵を談せず。
- (ニ) 言多き者は卑しとせらる。

(ホ) 梅あり、桃あり、櫻あり。

(ヘ) 家を辭して外に居る事十三年。

(ト) 來む世には虫にも鳥にもなりなむ。

(チ) 噂をすれば影がさす。

二 次の文に誤あらば正せ。

(イ) 拙き口語などに譯さぬがよし。

(ロ) 死のうが生きようが勝手にしろ

(ハ) 一寸の虫にも魂はあろう。

(ニ) 棄つる神あれば助くる神ある。

(ホ) 子を愛さぬ人はあらし。

動詞には、前述の如く、文語は九種、口語は五種の活用がある。
これを比較すれば次の通りである。

文語

口語

四段活用

奈行變格活用
四段活用

良行變格活用

上二段活用

上一段活用

下二段活用

下一段活用

下一段活用

加行變格活用

加行變格活用
(はやゝ異なる)

佐行變格活用

佐行變格活用
(はやゝ異なる)

これらの動詞の活用を簡便に見分けるには、先づ上一段下一段活用は所屬の語が少いから悉く諳記しおきてそれと知るべく、その他の動詞は、下に「ず」を續けて見て、

一 「讀ま(ア段)ず」「書か(ア段)ず」のやうにア段の音に續く

ものは四段活用

二 「落ち(イ段)ず」「悔い(イ段)ず」のやうにイ段の音に續く
ものは上二段活用

三 「兼ね(エ段)ず」「受け(エ段)ず」のやうにエ段の音に續くも
のは下二段活用

と心得るがよい。尙、口語は、二段活用が無いから、變格以外のものは、この方法によつて、ア段に續けば四段、イ段に續けば上一段と知るがよい。

練習

次の動詞の活用の種類を簡便法によつて調べて見よ。

- 明く 暮る 正す 榮ゆ 結ぶ 誤る 置く 刎ぬ 更く 催す
- 愛す 添ふ・咽ぶ 滿つ 輝く 消ゆ 歩く 認む 濡る 捕ふ
- 越ゆ 越す 起く 射る

練習七

第三章 動詞の活用形

- (一) 我死なば家運衰へむ。
いざ國の爲に死なむ。
- (二) 死に行く人ぞあはれなる。
生ける者は必ず死ぬ。
- (三) 死ぬる人いと多し。
- (四) 國の爲に死ぬれば餘榮あり。
- (五) 身は死ぬれど魂は未だ死なず。
- (六) 汝等國の爲に潔く死ぬ。
- 右の例に示したやうに、「死ぬ」といふ文語の動詞は、その用ひ方によつて、「死な」「死に」「死ぬ」「死ぬる」「死ぬれ」「死ね」と活用し、

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
(一) 未然形 「死なは、主として下の「ば」「む」などに連つて、物事の未だ成立たぬ意をあらはすに用ひる形だから、これを未然形といふ。	(二) 連用形 「死には、主として下の用言に連ねるに用ひる形だから、これを連用形といふ。	(三) 終止形 「死ぬは、主として文をいひきるに用ひる形だから、これを終止形といふ。	(四) 連体形 「死ぬるは、主として下の体言に連ねるに用ひる形だから、これを連体形といふ。	(五) 已然形 「死ぬれは、主として下の「ば」「ど」「ども」などに連つて、物事の已に成立つた意をあらはすに用ひる

各形がそれ／＼その作用を異にする。依つて、便宜上各形の主なる作用によつて、それ／＼次の如き名稱をつける。

命令形

形だから、これを已然形といふ。

(六) 命令形 「死ぬ」は、主として命令の意をあらはすに用ひる形だから、これを命令形といふ。

「死ぬ」ばかりでなく、動詞はすべて右の六つの語形を持つてゐる。けれども、他の動詞は、語形の變化の数が少いから、一つの形で二つ以上の作用を兼ねてゐるのがあつた。今、次に各種の動詞を表にして示さう。

種類	語根	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段	讀	ま	み	む	む	め	め
上二	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ち
下二	受	け	け	く	くる	くれ	け
上一	(見)	み	み	みる	みる	みれ	み
下一	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け

種類	語根	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
加變	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こ
佐變	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せ
奈變	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
良變	有	ら	り	り	る	れ	れ

口語では、奈變良變は四段となり、上二段下二段は上一段下一段となり、加變佐變は、口語でもやはり變格だが、文語とは稍異なる所がある。

種類	語根	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段	讀	ま	み	む	む	め	め
上二	有	ら	り	る	る	れ	れ
上一	落	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ち
上一	(見)	み	み	みる	みる	みれ	み

動詞の活用形

以上の未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形の六つを動詞の活用形といふ。

〔注意〕活用形の名稱は、その主なる用法について便宜的に與へたものであるから、その他の用ひ方が全く無いものと思つてはならぬ。

これらの六つの活用形を簡便に知るには、次のことを記憶しておくのが最も宜しい。

- (一) 未然形 「む」「ず」などに續く形。
- (二) 連用形 「たり」「て」などに續く形。
- (三) 終止形 言ひ切る形。

佐 變	加 變	下 一	
		(蹴)	受
(爲)	(來)	け	け
しせ	こ	け	ける
し	き	ける	ける
する	くる	ける	けれ
する	くる	ける	けれ
すれ	くれ	け	け
しせ	こ	け	け

練習八

- (四) 連体形 体言に續く形。
- (五) 已然形 「ども」に續く形。
- (六) 命令形 「よ」をついたり又はつけなくても命令の意を表す形。

練習

一 次の動詞を活用によつて類別し、その六つの活用形を示せ。

榮ゆ 掛く 企つ 疲る 取る 問ふ 恥づ 得 急ぐ 立つ
 棄つ 數ふ 沮む 悔ゆ 据う 恨む 懲る 懲らす 閉づ
 撫づ 汲む 生ふ 生ゆ 信用す 越ゆ 堪ふ 率ゐる 蹴る
 來^ク 來る 有り 居^リ 居る 死^ス 死す 暮^ラ 暮らす 暮る 爲
 す 親しむ 起く

二 次の文中の動詞の活用の種類と活用形を示せ。

- (イ) 熱心に研究せば學業日に進まむ。
- (ロ) 恩を受けては必ず報いよ。

(ハ) 人は交る友によりて善きにも悪しきにも移る。
 泣く子と地頭には勝たれぬ。
 虫の音滋き草を踏めば、月影爪先に散り行く。露のこぼるゝなり。
 白日山に入り、涼は夕と共に生ず。
 硝子窓から漏れて来る月影が淡く疊を照らしてゐる。机を離れてごろりと横になる。
 (ト) 曉に起きて望めば、前面早く家々の壁と寺塔とを辨ずることを得たり。
 (チ) 朝の露がまだ乾かぬ間に散歩に出る。海は金色の光を放ち、千年の松が涼風に戦ぐ。浪はどつと寄せて、白い泡を濱に噴いてさつと引いて行く。小舟が浮寝の鳥のやうに漂ふ。
 (リ) 三 次の文に誤あらば正せ。
 (イ) 勤む時は勤め、遊ぶ時は遊ぶべし。
 (ロ) 見渡さば都の空にもはや秋は立ちたり。
 (ハ) 溪に沿うて進まば、山高く聳え水清く流れたり。

復習三

(ニ) (ホ) 財貨は盡きることあれど、芳名は朽ちることなし。
 世には無爲無能にして其の父母の恩に報ゆること能はざる者あり。
 (ヘ) (ト) 棄てる神あれば助ける神あり。
 彼は慾深くして飽くることなし。
 (チ) (リ) 國賓の一行はいよゝゝ帝都を辭すこととなれり。
 (ヲ) (ル) 對岸には山高く聳えて、呼べばまさに答へんとす。
 (ヌ) 人知れず心配ばかりして居ります。
 (ル) 絶えず勉むるものは困難なことでも必ず遂げる。
 (ヲ) 忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人のいのちの惜しくもあるかな。

復習

一 次の動詞の六つの活用形を示せ。

(イ) 見ゆ 報ゆ 絶ゆ 飢う 甘ゆ 肥ゆ 恥づ 攀づ 交ず 變ず
 重んず 捕ふ 備ふ 戦ふ 聞ゆ 据う 堪ふ 率ゐる

(ロ)

生ゆ 消ゆ 老ゆ 悔ゆ 用ふ 居^キる
飢ゑる 絶える 堪へる 見える 報いる 揃へる 整へる
植ゑる 訴へる 教へる

二

次の動詞を二様に活用させて見て、その意味のちがひを考へよ。
焼く 立つ 進む 育つ 折る 整ふ 沈む 入る 破る
解く 碎く 届く

三

次の文に誤あらば正せ。

「よし、もうまちがいは無い。」と大急ぎで教室を出て、三四人かたまつている友達の中に割りこみ、それでも思もわれる個所を聞ひて見ると、皆合つてゐる。しめた！あつ、あの單語に譯をつけて來なかつたかな……ふと起こつた疑惑の雲はます／＼擴がつて、心臓の鼓動は次第に高まつてくる。

「おい君、あの單語には譯をつけるんだつたね。」

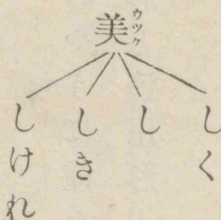
と、せめてもの僥倖を頼みながら聞くと、「勿論さ。」と、友達はすげない返事をする。アクセントの出來がよいので、喜びすぎて譯を忘

形容詞の活用

○ 形容詞の活用には二種ある。

第四章 形容詞の活用及び活用形

すれるなんて、何という馬鹿だろう。試験にはいつでも繰りかへす失敗だ。これから氣をつければよるんだ。何だ、これぐらゐの事にへこたれて、と思うけれどもやつぱり未練が残こる。友達の眼は皆勝利に輝いてゐる。



ク活用
シク活用

「高し」のやうに、ク・シ・キ・ケレと活用するものをク活用といひ、「美し」のやうに、シク・シ・シキ・シケレと活用するものをシク活

用といふ。この二種の活用は口語にもあるが、口語では、ク活用はク・イ・イ・ケレと活用し、シク活用はシク・シイ・シイ・シケレと活用する。

⊖ 形容詞も亦動詞のやうに種々の活用形を持つてゐるが、その活用形は、未然形と連用形とが同じで、且つ命令形を缺いてゐる。

未然形 價高くば買はじ。

花美しくとも毒あらむ。

連用形 價高く買ひたり。

花美しく咲く。

終止形 價高し。

花美し。

連体形 高き價にて買ひたり。

美しき花咲きたり。
 已然形 價高ければ買はず。
 花美しけれども毒あり。
 今、これを表示すれば次のとおりである。

種	類	語根	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ク	活用	高 ^カ	ク	ク	シ	キ	ケレ	○
シク	活用	美 ^{ウツク}	シク	シク	シ	シキ	シケレ	○

又、口語では、

種	類	語根	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ク	活用	高 ^カ	ク	ク(ウ)	イ	イ	ケレ	○
シク	活用	美 ^{ウツク}	シク	シク(シウ)	シイ	シイ	シケレ	○

と活用し、文語の「シ」「キ」が「イ」となり「シ」「シキ」が「シイ」となる

ばかりでなく、連用形の「ク」「シク」が「ウ」「シウ」となることもある。

〔注意〕 文語のシク活用の終止形は「シ」である。随つて「惡しし」「勇ましし」のやうに二つ重ねるのは誤である。

〔注意〕 形容詞の連用形はその用ひ方によつて副詞に轉ずる。

◎ 我々のこれまでに學んだ形容詞は、すべて物事の性質状態等をあらはすと共にク・ク・シ・キ・ケレ又はシク・シク・シ・シ・キ・シケレと活用するものであつたが、國語の中には、又、

- (一) 樂しかりし日を憶ふ。
- (二) 靜かなる地を望む。
- (三) 白雲悠々たり。

の「樂しかり」「靜かなる」「悠々たり」などのやうに、物事の性質状態等をあらはすことは普通の形容詞と同じで、その活用が、

形容動詞

動詞の良行變格活用と同じく、

樂し	から	かり	かり	かる	かれ	かれ
靜か	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
悠々	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

と活用するものがある。かゝる語を特に形容動詞と名づけて、形容詞の一種と見做す。

〔注意〕 形容動詞が、文の中止する所に用ひられる時には、次の如き形をとることが多い。

月明かに星稀なり。
花美麗にして水清し。

〔注意〕 「美しかり」のやうな活用の終止形は今では用ひられない。

口語の形容動詞は、活用が完全に備はつてゐない。

練習九

未然形 連用形 終止形 連体形 已然形 命令形

善マ から(ウ) かつ(タ) ○ ○ ○ ○

なら(バ) だつ(タ) だ な なれ ○ ○ ○ ○

静シ だら(ウ) であつ(タ) である ○ ○ ○ ○

か であら ○ です ○ ○ ○ ○

の如く活用するのが最も普通である。

〔注意〕「よかれあしかれ」「遅かれ早かれ」の如き場合に限つて命令形も用ひる。

練習

- 一 次の形容詞の活用をいへ。
面白し 白し 寒し うるはし 弱し 深し 恐ろし 直し
目ざまし うらめし 花々し 無し
- 二 次の文の中から形容詞を見出して、その活用及び活用形を説明せよ。

- (イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ) (ヘ) (ト) (チ) (リ) (ヌ) (イ) (ロ) (ハ) (ニ) (イ)
- 月は益、淡く東いよ〜白し。
人の死する時、その言やよし。
水清ければ魚棲まず。
面は白けれども心は黒し。
人生は短く、藝術は長し。
賤しい人にも貴い行がある。
死するは易く、生くるは難し。
涼しい風が絶えず遠くから吹いてくる。
言多き者は卑しとせられ、語少きものは憚らる。
正しい行をすれば、貧しい家に住んでゐても、心は樂し。
- 三 次の文に誤あらば正せ。
- (イ) 夕映えの海いと美しし。
(ハ) ひもじひ時にまづひものは無い。
(ロ) 河豚は食ひたし命は惜しし。
(ニ) 明けましておめでとうございます。

(ホ) よふこそお出で下さいました。

四 次の文中の傍線を施した部分のちがひを説明せよ。

楠木正成は忠臣なり。

A 少年の品行は方正なり。

父は陸軍大將たり。

(ロ) 威風堂々たり。

五 次の文の中から形容動詞を見出して、その活用形を説明せよ。

(イ) 寒からず暑からず、今は最好の時節なり。

(ロ) 廣漠たる平野の緑は人の心を快闊ならしむ。

(ハ) 朝來暖煙軽く揚りて、曉風いと爽かなり。

(ニ) 今や乾坤一轉して、靄然たる瑞氣の搖曳するを見る。

(ホ) 皎々たる明月や皚々たる白雪を眺めて居る間は、如何なる人も利

慾に營々たる實社會を忘れる。

(ヘ) 物言はぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を

思ふ。

(ト) 今まで静かだつた校舎内が俄に騒がしくなつて、彼方此方の教室

の戸が前後して慌しくぱつくと開く。と、その狭い口から、眞黒

な塊がどつと廊下へ吐きだされ崩れてばら／＼の子供になる。

六 次の形容動詞の活用を示せ。

深かり 遠かり 稀なり 閑静なり 慨然たり 滔々たり

第五章 音便

○ 動詞の連用形から「て」又は「た」「たり」につゞく場合には、

發音の便宜上、その語尾が、

書いて 問うた 賣つたり 買つたり

のやうに、他の音に轉ずることがある。これを動詞の音便といふ。

〔注意〕口語では音便の方が普通である。

動詞の音便

動詞の音便には次の四種がある。

い音便

(一) い音便 「き」「ぎ」「い」になる。

説 <small>い</small> いて	説 <small>い</small> いた	説 <small>い</small> いたり	騒 <small>ぎ</small> いで	騒 <small>ぎ</small> いだ	騒 <small>ぎ</small> いだり
-----------------------	-----------------------	------------------------	-----------------------	-----------------------	------------------------

う音便

(二) う音便 「ひ」「が」「う」になる。

買 <small>う</small> うて	買 <small>う</small> うた	買 <small>う</small> うたり	失 <small>ひ</small> うて	失 <small>ひ</small> うた	失 <small>ひ</small> うたり
-----------------------	-----------------------	------------------------	-----------------------	-----------------------	------------------------

鼻音便

(三) 鼻音便 「に」「び」「み」が鼻音「ん」になる。

死 <small>ん</small> で	死 <small>ん</small> だ	死 <small>ん</small> だり	選 <small>ん</small> で	選 <small>ん</small> だ	選 <small>ん</small> だり
----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------

促音便

(四) 促音便 「き」「ち」「ひ」「り」が促音「つ」になる。

行 <small>つ</small> て	行 <small>つ</small> た	行 <small>つ</small> たり	打 <small>つ</small> て	打 <small>つ</small> た	打 <small>つ</small> たり
思 <small>つ</small> て	思 <small>つ</small> た	思 <small>つ</small> たり	切 <small>つ</small> て	切 <small>つ</small> た	切 <small>つ</small> たり

㊦ 形容詞にも音便がある。文語の形容詞の音便には次の二種がある。

い音便

(一) い音便 「き」「が」「い」になる。

善 <small>い</small> いかな	善 <small>い</small> いかな
美 <small>い</small> いかな	美 <small>い</small> いかな

う音便

(二) う音便 「く」「が」「う」になる。

暗くして——暗うして
 高く聳ゆ——高う聳ゆ
 又、形容詞の連用形から轉じた副詞が佐行變格活用の動詞「す」と複合して一つの動詞となつた時、その語尾「く」が鼻音便又はう音便を起すことがある。

重くす——重んず
 全くす——全うす

口語の形容詞にはう音便があるばかりだ。
 懐しく。思ひます——懐しう。思ひます。

練習九

練習

- 一 次の文中の音便を指摘して其の原音を示せ。
 (イ) 負うた子に教へられて淺瀬を渡る。
 (ロ) 湖の面は眠つて居るやうに靜かである。

(ハ) (ニ) (ホ) (ヘ) (ト)

咲いた櫻になせ駒つなぐ。駒が勇めば花が散る。
 太平愈、續いて文化愈、進む。文化愈、進んで生活の程度愈、高し。
 旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。
 あゝ面白き眺なる。大和島根の有様や。山高うして水清く。松
 青うして砂白し。
 おゝ、楽しげに軽らかに。みんなで跳ね上つて障害物を越えたり
 輪を巻いて踊つたり。急に輪をほどいて走り出したり。狂ふや
 うに楽しく興奮して。先へくと笛を吹いて走つてゆく。美し
 い水の精よ。

二 次の文に誤あらば正せ。

(イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ) (ホ)
 飲んだり食ふたりすることばかり考へてゐる。
 敵はつひに國を割いて和を請ふた。
 朝はやふ起きるは健康にも益あり。
 人はすべて心を正しふすることを望ましけれ。
 冀くは仰ひて天に恥じざらんことを。

(ヘ)(ト)(チ)(リ)

首尾よふ合格せられて、誠におめでとふございます。
出師の表を読むで泣かざるものは人にあらず。
溪に沿ふて進めば、山高ふ聳え水清う流れて、屋外の趣あり。
人の苦しみを見てうれしふ思ふ人の心はいとあさまし。

第六章 助動詞の種類

助動詞は名詞や動詞などのやうにさう多数あるものではない。普通用ひられる助動詞をその意味によつて分類すると、およそ次の九種になる。

(一) 受身の助動詞

る(レル)
らる(ラレル)

可能や尊敬の意をあらはすこともある。

(二) 使役の助動詞

す(セル)
さす(サセル)
しむ

尊敬の意をあらはすこともある。

(三) 打消の助動詞

ず(ヌイ)
ざり(ナカツ)
じ

主として未來の時をあらはす。

(四) 時の助動詞

き
けり
つ
ぬ
たり
り
む(ヨウウ)
(ク)

「き」「けり」は過去の時、「つ」「ぬ」「たり」「り」は現在完了の時をあらはす。「けり」は詠歎の意をあらはすこともある。

(五) 推量の助動詞

べし	べかり	まじ(マイ)	けむ	らむ	めり	らし
----	-----	--------	----	----	----	----

命令可能決意等の意をあらはすこともある。

(六) 指定の助動詞

なり	たり	なり
	(ダ)	(ス)

動詞の連体形につく。

(七) 詠歎の助動詞(なり)

動詞の終止形につく。

(八) 希望の助動詞(たし)(たい)

(九) 比況の助動詞(ごとし)

練習

練習一〇

次の文中の助動詞の意味のちがひを示せ。

一 今宵は鳴く虫も多きなり。
汝と今や別るなり。

二 我は思はず笑ひたり。
父は陸軍大將たり。

三 六尺の屏風も飛び越えらる。
犬人に蹴らる。

四 花咲かず。
花咲かじ。

五 大工に家を建てさせたり。
天皇日比谷に臨幸せさせ給ふ。

六 昔男ありけり。
吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり。

第七章 助動詞の活用

助動詞も亦動詞・形容詞のやうに大抵は活用する性質を持つてゐることは、我々のすでに學んだところであるが、その中には、文語の「る」「らる」「す」「さす」「しむ」口語の「れる」「られる」「せる」「させる」のやうに、

		文語		口語	
る	れる	る	れる	る	れる
らる	られる	らる	られる	らる	られる
す	する	す	する	す	する
さす	さす	さす	さす	さす	さす
しむ	しむ	しむ	しむ	しむ	しむ
れる	れる	れる	れる	れる	れる

と動詞の下二段活用と同じく活用するものもあり、文語の「なり」「たり」「けり」のやうに、

		口語	
なり	なる	なり	なる
たり	たる	たり	たる
けり	ける	けり	ける
なれ	なれ	なれ	なれ
たれ	たれ	たれ	たれ
けれ	けれ	けれ	けれ

と動詞の良行變格活用に似た活用をするものもあり、文語の「ぬ」のやうに、

		口語	
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
な	なる	な	なる
に	に	に	に
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ

の「べし」「たし」「ごとし」「口語の「らしい」「たい」「ない」のやうに、

べし べく べく べし べき べけれ ○

文語 たし たく たく たし たき たけれ ○

ごとし ごとく ごとく ごとし ごとき ○

口語 たい たく たく(う)たい たい たけれ ○

らしい らしく らしく らしい ○

ない ○ なく ない ない なけれ ○

と形容詞とほゞ似た活用をするものもある。かやうに用言のやうな活用をする助動詞は、その用言の活用から、その活用及び活用形を類推することもできようが、助動詞の中には、又次のやうな一種特別の活用をするものもあるから、これは特に注意して記憶しておかねばならぬ。

(一) 文語

未然 連用 終止 連体 已然 命令

ず す す す ぬ ね ○
き ○ ○ き し しか ○

〔注意〕 この外に、「む」「らむ」「げむ」も特殊の活用をするが、現在は、「む」の終止形の他は用ひられない。

〔注意〕 「ごとし」は形容詞に似た活用をするが已然形がない。随つて、「ごときれ」といふのは誤である。

(二) 口語

未然 連用 終止 連体 已然 命令

ぬ ○ たてり ○ ぬ ぬ ね ○
た たら ○ た た ね ○ ○ ○
だ だら ○ だつ ○ ○ ○

助動詞には又文語の「じ」「らし」「口語の「う」「よう」「まい」のやうに活用しないものもある。

練習一

練習

一 次の助動詞の求められた活用形をいへ。

「ず」の未然形・連体形・已然形

「き」の已然形

「ぬ」の未然形・連用形

「す」の連用形

「り」の未然形

二 次の文の中から助動詞を見出して其の活用形を説明せよ。

歲月は人を待たず。

田舎者に道を尋ねらる。

蒔かぬ種は生えぬ。

勝敗の数は全く定まれり。

(イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ)

夜明けぬ中に家を出でむ。

窮屈だから出ようと思ふがなかく、出ることができない。

何處ともなく失せにけり。

一炬の煙となしはてぬることあはたゞしかりしか。

田越の里に明かし暮らしし幾春秋こそ心ゆくばかり罷ばるれ。

うるはしき日は夢の如く消え去りぬ。あゝ、心を傷ましむるかな。

さあ日が上つた。そろ／＼出かけよう。

主人も客も一しよにあはゝと笑つた。

用事が出来たらすぐ呼ぶことにしよう。

渦巻く波にざんぶと飛び込んだ。

空漠たる山中に人跡絶えたり。

三 次の文に誤あらば正せ。

その文章を余に讀まし給へ。

枯木に花を咲かしたり。

その説一理あるが如けれど、俄に首肯する能はず。

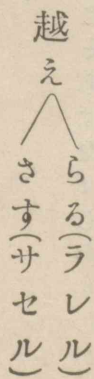
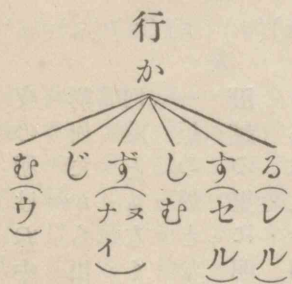
(ホ) (ヘ) (ト) (チ) (リ) (ヌ) (ル) (ヲ) (ワ) (カ) (ヨ)

(ト)(〜)(ホ)(ニ)

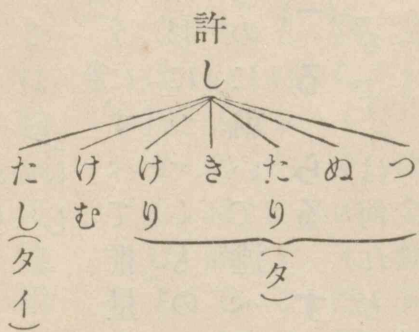
朝早く起きやう。
 私も未だこのまゝで朽ち果てやうとは思はぬ。
 光陰は矢の如ければ愛惜すべし。
 天氣がよければ散歩しやう。

第八章 助動詞の接續法

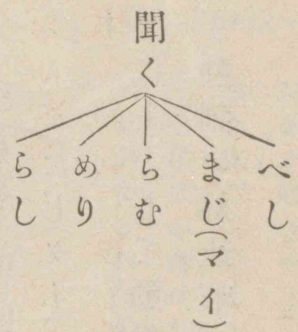
助動詞が動詞につゞくには、おのづから一定のきまりがある。大体について言へば、動詞の未然形につゞくものは、



のやうに、受身使役打消未來の意味を持つてゐるものであり、動詞の連用形につゞくものは、



のやうに、主として動作の過ぎ去つた意味をあらはすものであり、動詞の終止形につゞくものは、



のやうに、すべて推量の意をあらはすものであり、又動詞の連体形につゞくものは「なり」の一語である。今、次に誤り易いものに就いて述べて見よう。

(一) る らる す さす しむ

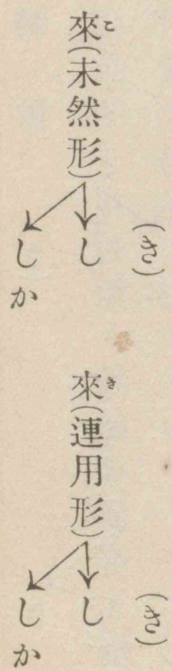
「る」「す」は何れも未然形がア段にある動詞の未然形に、「らる」「さす」はその外の動詞の未然形につゞく。従つて佐行變格動詞に「らる」「さす」がつゞく時にも、その未然形から續けて「罪せらる」「打擲せらる」「掃除せさす」「勉強

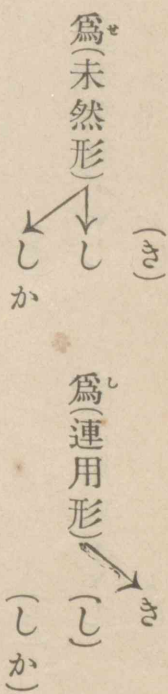
「せさす」といふべきだが、現代文では「罪さる」「打擲さる」「掃除さす」「勉強さす」といつてもよい。

又、「しむ」は全動詞の未然形につゞく。従つて上一段動詞にもその未然形からつゞけて「着しむ」「見しむ」「射しむ」といふべきで、これを「着せしむ」「見せしむ」「射せしむ」などといふのは誤である。たゞ下二段の「得」だけは、現代文では「得せしむ」といつてもよい。

(二) き

「き」は動詞の連用形に續くのだが、加行佐行の兩變格活用の動詞に續く時に限つて、次の如く變則である。





従つて、左行變格動詞に「し」「しか」をつゞける場合に、「勉強しし」「勉強ししかば」の如く用ひるのは誤である。又、四段活用は左行でもやはり「押しし」「申ししかば」の如く用ひるのが古來の習はしであるが、現代文では「押しし」「申ししかば」と用ひることもある。

(三) め

「め」は奈行變格活用の動詞には續かない。従つて、「死にぬ」「死ににけり」などといふのは誤だ。

(四) べし まじ

「べし」「まじ」は良行變格活用の動詞には連体形に、その外

の動詞には終止形につゞく。然るに、これを上二段下二段變格活用の動詞に連ねる時、連体形や連用形につゞけ易いから注意せねばならぬ。

〔注意〕口語の「まい」は四段活用には終止形に、その他の動詞には未然形につゞく。

(五) り

「り」は四段活用又は左行變格活用の命令形にだけつゞく。然るに、これを他の動詞に連ねて「受けり」「晴れり」「試めり」などと言ひ易いから注意せねばならぬ。たゞ形容動詞「異なり」につゞけて「異なれり」と用ひることだけは、現代文では差支へがない。

助動詞と助動詞との接續も動詞の場合と變らない。

練習

練習二

一 次の文に誤あらば正せ。

敵艦白旗を掲げり。

こゝに塵を捨つるべからず。

正直ならば人に信用さる。

年老いて氣力大いに衰へり。

この恨永へに忘らるゝまじ。

まさかそんな事はするまい。

この品に手を觸れるべからず。

適當の方法を講じざるべからず。

歸らうとしても中々歸らせない。

あの人には知らさなくともいゝだらう。

一日も光陰を徒費ししことなし。

無用の事には關係せまじきものなり。

諸藩に詔してこれを議さしむ。

平家の軍を壇の浦に破れり。

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)(ト)(チ)(リ)(ヌ)(ル)(ヲ)(ワ)(カ)

(ヨ)(タ)(レ)(ソ)(ツ)(ネ)(ナ)(ラ)(ム)(ウ)(キ)(ノ)(オ)(ク)(ヤ)

我が軍脆くもつひに破れり。

古來偉人と稱さるゝ人は多く微賤より起れり。

甲は乙をして丙に書物を見せしむ。

我が嫌ふ事をもて人に強ゆべからず。

勉強しし甲斐ありて首尾よく入學せり。

かくと申せしかばそれにてよしと言はれし。

花を咲かせしむるも雨花を散らせしむるも亦雨なり。

汝が考ふ如く容易に破られまじ。

言はして置けば勝手な熱を吹く。

かゝる事實ありとも信じられず。

花の見えぬは霞のこれを隔つるなり。

萬里の波濤も越えば越ゆるべし。

郡制の廢止によりて兩郡合併されたり。

道すがら四方の梢の色々なるを御覽じさせ給ふ。

彼は愛すべくして狎るゝべからず、畏るゝべくして嫌ふべからず。

る人なり。

(マ) 身体に害を及ぼせしは、過度に勉強ししが故なり。

(ケ) 彼もしこの局に當りたらむには、必ずや非常の功を奏すならむ。

(フ) 汝もし今にして廢さずば、後必ず悔ふることあらむ。

(エ) 弓を射らむとするものは、姿勢を正しうし、一本の矢をもあだになせじと思ひて、心をゆるむるべからず。

(ト) 家貧しければ、中等教育も施せず、讀書算術を學ばしたる後は、自活の道に就かせしめたり。

(イ) 人いかに笑ふとも、自ら守る所堅く、行ひ道に違はずば、何の恥づる事かこれあらむ。

二 次の讀方を示せ。

(イ) 得む 得べし 得たり

(ロ) 來む 來ぬる 來しか

第九章 助詞の用法

と

〔一〕「と」の用法

(一) 並列の「と」

事物を並列する場合の「と」は、各語句ごとに一々添へるのが最も正しい用法であるが、今は最後の「と」を省くことが多い。

月と花(と)

宗教と道德(と)の関係

京都と神戸と長崎(と)へ行く。

これらの例のやうな場合には、「と」を省いても誤解を生ずる恐がないから、これでもよいが、

甲と乙の父に會ひたり。

五と六の三倍は幾何か。
の如き場合には、二様の意味にとれて紛はしいから、決して省いてはならぬ。

(二) 指示の「と」

前文を指示する場合の「と」が用言に接するには、終止形でも命令形でも連体形でも已然形でもすべて文句の切れるところに添ふ。

命長ければ辱多しと言へり。

本を持ち來れと命じたり。

汝何をか憂ふると問はせ給ふ。

祝ふ今日こそ樂しけれと唱ふ。

現代文では、終止形を承けるべき場合に連体形を承ける習慣あるものは許される。

と

に
へ

月出づると見えて。

嘲弄せらるゝと思ひて。

終日業務を取扱はしむるといふ。

萬人皆其の徳を稱へけるとぞ。

〔注意〕「善きと悪しきとの差」「好まるゝと嫌はるゝとは心がらなり」の如き場合の「と」は並列の「と」であつて、「と」の上に體言のあるのを省いた形であるから正しいのである。

〔二〕「に」「へ」の用法

京都に住む。 烏枯枝にとまる。

京都へ行く。 烏枯枝へ飛び去れり。

右の「に」は場所を示し、「へ」は方向を示す。故に、この二語は明かに區別して用ひるやうにせねばならぬ。

◎ 口語では「へ」も「に」も同じやうに用ひられる。

練習十三

練習

次の文に誤あらば正せ。

- 一 學深くとも必ずしも徳高きとは限らざるなり。
- 二 英語と國語の書取は完全に出來た。
- 三 予はこの春京都に行く筈なり。
- 四 三日と五日の休日には大いに勉強する心算なり。
- 五 小林と森田の弟は同級だ。

ば

〔三〕「ば」の用法

明日雨降らば中止せむ。
 雉子も鳴かずばうたるまじ。
 水清ければ大魚棲まず。
 風吹けば今日も船を出さず。

右の文例における「ば」は、活用する語の未然形につく時には

ども
ど

假定の意をあらはし、已然形につく時には既定の意をあらはす。

◎ 口語では、已然形に「ば」をつけて假定既定兩様の意味をあらはすが、實際から言へば、既定の意味は「から」の「で」を用ひることが多い。

〔四〕「ども」「ど」の用法

明日は雨降るとも行かむ。
 如何に笑はるとも堪へむ。
 成績あしくとも悲觀すべからず。
 不老の薬は得たくとも得られじ。
 雨は降れど風は吹かず。
 櫻は美しけれども散り易し。
 年老いたれど氣力衰へず。

右の文例中、「とも」は動詞及び動詞の活用と同じき助動詞の終止形・形容詞及び形容詞の活用に同じき助動詞の未然形に接続して假定の意味をあらはし、「ども」は動詞・形容詞・助動詞の已然形に接続して既定の意味をあらはす。但し、「とも」は「數百年を経るとも」「如何に批評せらるゝとも」「強ひて之を尊奉せしむるとも」の如く連体形に接続することもある。勿論古文の用法とは異なるが、現代文では許される。又、現代文では「とも」「ども」の代りに「も」を連体形に續けて用ひることも誤解を生じない限りは許されるが、次の如き場合には、「とも」「ども」兩様の意味に取れて紛はしいから、明瞭に用ひわけねばならぬ。

請願書は會議に付するも之を朗讀せず。
給金は低きも應募者は多かるべし。

◎ 口語では、「とも」「ども」の場合に「ても」「でも」「けれども」「けれども」が一般に用ひられる。

練習

練習一四

次の文に誤あらば正せ。

- 一 若し明日雨降れども彼は歸國すべし。
- 二 今夕御都合宜しければ御訪問申し上げべく候。
- 三 彼老いたりとも戰場に臨めば必ず壯者を凌がん。
- 四 たとひ食盡き刀折れるとも如何でか屈すべき。若し食盡きれば砂を噛みても進まむ。若し刀折れば空拳を揮ひても戦はむ。
- 五 如何なる方便を用ふれども、目的だに正しければ可なりと言ひ得るか。
- 六 志いかに堅くも、身体弱ければ、目的を達し得まじ。
- 七 嬉しとも笑はず、悲しとも歎かず。

やか

〔五〕「や」「か」の用法

かゝる事ありや無しや。
 春や疾き花や遅き。
 君はそこに幾年住みしか。
 霞か雲かはた雪か。
 その時悔ゆとも甲斐あらむや。
 空しく日をや過すべき。
 かゝる事いふべきか。
 誰か鳥の雌雄を知らむ。
 右の文例における「や」「か」は何れも疑問又は反語の意をあらはす。そして、これが用言に接續する場合には、「や」は終止形に、「か」は連体形に續くきまりである。但し、現代文では「や」も連体形に續けて「あるや」「なきや」の如く用ひることも許される。

な

〔六〕「な」の用法

さされる。
 ◎ 上に疑の語「何」「誰」「幾何」のやうなのがある時には、必ず「か」を用ひるのが古文のきまりであるが、現代文では「や」を用ひることも許される。
 ◎ 「や」「か」には感動の意をあらはすものもある。
 荒海や佐渡に横たふ天の河。
 こゝに於てか予も亦已めたり。
 ◎ 口語では専ら「か」を用ひる。
 禁止の意味をあらはす「な」は、ラ行變格活用の動詞に限つて其の連体形に續き、他にはすべて終止形に續く。隨つて、こゝに塵を捨つるな。
 油斷して追ひ越さるゝな。

の如き用ひ方は間違つてゐる。又「なかれ」といふ語は、意味は「な」と同じだが、全く別の語で連体形につく。「な」と混同して、

親の恩を忘るなかれ。
などと用ひてはならぬ。

◎「な」と同じく禁止の意味をあらはす助詞「な……そ」といふ語は、古文には用ひられたが、今は用ひられない。漫りに高き所をな望みぞ。

練習一五

練習

次の文に誤あらば正せ。

- 一 敵多くとも恐るゝな。
- 二 萬事に油断するな。
- 三 主なしとて春な忘れぞ。

さだに
すら

- 四 水一升の體積は幾何なりや。
- 五 世人に譏らるゝは心憂き事なるや。
- 六 首尾よくその任務を終りたる者は休養を許さるゝべし

〔七〕「だに」「すら」「さへ」

- (一) 鳥にだに如かず。
- (二) 思ひ出だすだになつかし。
- (三) 犬すら三日の恩を知れり。
- (四) 雨降り風さへ吹く。

右の「だに」「すら」は軽い物事をあげて重い物事を言外にさ
とらせる意をあらはし、「さへ」はあるが上に更に物事の添ひ
加はる意をあらはす。

〔注意〕 口語では「だに」「すら」もなく、「さへ」だけ用ひるが、口語の「さへ」は文語
の「だに」「すら」に當る。

ばや なむ

〔八〕「ばや」「なむ」

- (一) 都の花の盛りを見ばや。
 - (二) われも行かばや。
 - (三) 無禮の罪は許さなむ。
 - (四) 櫻花よ、永く散らずあらなむ。
- 右の「ばや」は自分の希望を述べるに用ひ、「なむ」は相手の人なり物なりに對して願望するに用ひる。そして、どちらも用言助動詞の未然形につく。

〔九〕

前に述べた外の助詞「が」「の」「に」「を」「へ」「より」「まで」「は」「も」「ぞ」「こそ」「のみ」「ばかり」「よ」「かな」等が用言又は助動詞に接する時は、すべてそれらの連体形を受ける。

練習

練習一六

次の文に誤あらば正せ。

- 一 彼は日の出づるより日の没すまで蓄財に汲々たり。
- 二 この度の試験にさへ及第せば、何事も憂ふるに足らず。
- 三 人の一生は重荷を負ふて坂を攀ぶがごとし。
- 四 汝の隣人を愛せよ。決して惡に報ゆに惡を以てすること勿れ。
- 五 今度の作文は「墨堤に花を賞すの記」といふ題だ。

復習

復習四

一 次の和歌を助詞助動詞に注意して解釋せよ。

- (イ) 山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふたごころ我あらめやも。
(源實朝)
- (ロ) 心あらむ人に見せばや津の國の難波わたりの春の景色を。(能因)
- (ハ) 心だに誠の道にかなひなば祈らすとても神や守らむ。(菅原道真)
- (ニ) ひさかたの雨も降らなむ足引の山田の苗のかくるゝまでに。(良寛)

- (ホ) 池水に汗の櫻ちりしきて波の花こそさかりなりけれ。(平家物語)
- (ヘ) 龍田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦なかや絶えなむ。(古今集)
- (ト) 春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野の菟芽子摘みて煮らしも。(萬葉集)

二 次の文に誤あらば正せ。

- (イ) 眞の家庭教育は眞正なる家庭教育を受けたる母にあらざらば、これを爲すこと能はず。
- (ロ) 雨ばれの庭に立ち出でて春の行方を見渡すれば、たゞ夕風の寂しく梢の若葉を揺がして吹き過ぐのみ。
- (ハ) 天下の學生をして親しくかゝる大家の教を受くの機會を得せしむを得れば、いかばかり獎勵とやなるべき。
- (ニ) 彼もし死ねば玉と碎けてといひし兄の勇敢なるに似れば死して名を成さなむ。もし又弟の如き卑怯ならば、生きて辱を受くるべし。

第十章 連語

- (一) 花の都 梅が枝 君と 京都へ 明くるより暮るるまで 寒くとも
- (二) 晴れたり 書かしめず 笑はれぬ 行くべし 逢ひたかりしならむ

右の例の中、(一)は助詞が体言その他の語についたものである。かやうに、單語が二つ以上結びついて一つの連続した語をなしながら、未だ完全に纏まつた思想をあらはして居ないものを連語といふ。そして、(二)の例のやうに助動詞が用言についた連語を特に活用連語といふ。

連語

活用連語

練習一七

練習

次の中から連語を見出せ。

犬走る。走る犬。散りにけり。信仰する。寒からざるべし。徐ろに歩む。空晴れたり。晴れたる空。吹く風。風吹く。

復習

復習五

一 次の文を品詞に分け、且つ活用ある語はその活用形を説明せよ。

(イ) 古は蘆荻を分くるばかりなりし處も、時の行ければ賑はしき都としもなりにけり。

(ロ) 月下にほの白く眠る與謝の海。その懐には壁のやうな月を抱き、寐息かとはかり、ざぶり又ざぶりと白砂にこぼれる漣は、まるで眞珠をこぼすやう。

(ハ) 燈火の光、晴れたる夜の星にまがひて、いと涼しげなるに、たなびく雲の絶間より、夕日の影花やかに匂ひ出でたる、いとをかし。

二 次の文に誤あらば正せ。

日曜日朝私わ妹をつれて近くの原へ行つた。麗かな日ざしが私達の背に流れて、何となくだるひやうな感じを與えた。原の彼方此方に人が楽しそうに遊ぶでいた。私は妹の手をひきながら歩ひた。小さい土堤を傳はつて。

「兄ちゃん！」「何さ。」「變なものか。」「どれ。」「妹の指さす所を眺めた。一匹のまるく、肥へた芋虫が轉がつていた。そして、身体をびん／＼伸ばしたり縮めたりしていた。私達はじつとそれを見つめていた。やがて、芋虫は動かなくなつた。

「行こふよ。私わ無理に妹を引つばつて行つた。やがて、土堤も盡きた。」「下りやうか。」「私は先に下りやうとした。と、どうしたはづみか、つると迂つて、私の身体は下まで迂り下りた。妹が手を打つて笑つた。日は未だ高ひ。ちちちと鳥が鳴ていた。

三 次の文中の傍線ある語のちがひを言へ。

(イ) 行方も知らず失せにけり。
恨に報ゆるに徳を以てす。

夜も更けたるに未だ歸らず。
雨降りに降る。

曉近くまで起きぬたり。

(ロ) 落花紛々たり。

學生たる者のすまじき事なり。

(ハ) 花咲きぬ。

來ぬ人を待つ。

(ニ) 死にし子顔よかりき。

露と消えにし命かな。

(ホ) 故なきにしもあらず。

繪に書くとも筆も及ばじ。

(ヘ) 雨とも雪ともえ分かす。

汝は昨日いづこに行きしか。

(一) 平家の都落こそげに慌しかりしか。
いざ歸りなむ。

(ト) 柿本人麻呂なむ歌の聖なりける。
おのが身を修むる道を學ばなむ。

(チ) さては正しう我が子よな。
主なしとて春を忘るな。

(リ) 花散りなばと人や待つらむ。

(ヌ) 時鳥の聲を聞かばや。

(ニ) 心あてに折らばや折らむ。

(ハ) 波いと静かなり。

(ロ) 余は中學生なり。

(ハ) 人まつ虫の聲すなり。

(ニ) 人まつ虫の聲すなり。

第三篇 文

第一章 文の成分

〔一〕 主語 述語

⊖ (一) 花 咲く。

若草も 萌え初めたり。

犬が 吠える。

猫が 眠つてゐる。

(二) 風 寒し。

月 明かなり。

人生は 夢の如し。

日が 短い。

僕は うれしかつた。

(三) 余は 學生なり。

父は 海軍大將たり。

時は 金である。

右の文例の中、(一)は「何が ドウスル」(二)は「何が ドンナダ」(三)は「何が 何ダ」といふ形の文である。この「何が」に相當する語、即ち文の題目となる語を**主語**といひ、「ドウスル」「ドンナダ」「何ダ」に相當する語、即ち主語のあらはす物事について叙述する語を**述語**といふ。こゝでは、線ある語がそれ〴〵の文の主語、線ある語がそれ〴〵の文の述語である。主語と述語とは文を構成するに缺くべからざる要素である。

〔注意〕 主語又は述語はどちらか一方を省略することもある。

(一) あゝ(僕)は(ま)ま(く)し(と)。

(二) 地獄の沙汰も金次第(デアル)

殊に命令の文では主語を省略するのが普通である。

- (一) (汝)早く来い。
- (二) (汝等)氣をつけ。

㊦ 主語は、通例、體言又はそれに助詞のついた連語であり、述語は用言又は活用連語である。

- (一) 犬^精 走る^述。 花^精 美し^述。 月^精 明かなり^述。
- (二) 僕^主は 行きたい^述。 空^主が 曇り出した^述。

又、時としては、用言又は活用連語が助詞を伴なつて主語に、助動詞・助詞が單獨に述語になることもある。

- (一) 死ぬ^主るは 悲し^述。 問^主はぬこそ 恥なれ^述。
- 赤^主きが よし^述。

- (二) 犬^主は 動物^精 なり^述。 月色^精 鏡^精の 如し^述。

㊧ 文の最も簡單なものは、

主語 + 述語 (鳥 飛ぶ)

のやうな順序に排列するのが普通であるが、時にはこの順序を顛倒することもある。

- (一) 善い^述かな 言^主や。
- (二) 偉い^述ね 君^主は。

㊨ 文の中には、時としては、

- (一) 兎^主は 前足^精が 短^述い。
- (二) 石炭^主は 火力^精が 強^述し。

のやうに、ある一つの文を述語としてある主語を含んだものがある。これらの文では、「兎は」「石炭は」は各、下の文を述

文主語

練習一

語としてゐる主語である。これを文主語といふ。

練習

次の文中の主語述語を指示し且つそれが如何なる品詞から成り立つてゐるかを言へ。

- 一 煙立ちのぼれり。
- 二 これは面白い。
- 三 人々あわてふためく。
- 四 實行はむづかしい。
- 五 松風颯々たり。濤聲きこゆ。
- 六 金錢もあらず。權勢もあらず。
- 七 沈黙は愚人の甲冑なり。
- 八 恐らくはお前も知らないだらう。
- 九 過ぎたるは及ばざるが如し。
- 一〇 彼は性質が温和だ。

(二) 補語

⊖ (一) 犬 走る。

風が 烈しい。

月 明かなり。

(二) 風 袂を拂ふ。

余は 櫻花を 愛す。

次郎は 母に 死なれた。

雨 雪と なる。

病は 口から 入る。

六は 三よりも 多い。

苛政は 虎より 猛なり。

右の文例の中、(一)は何れも主語と述語とだけで叙述が完全であるが、(二)は何れも主語と述語とだけでは叙述が不完全

補語

である。更に傍線を施した語のやうに述語の意義を補ふ語を要する。かやうに、述語の意義を補つてその叙述を完全にする語を補語といふ。

㊦ (一) 父 家を 子に 譲る。

(二) 僕は 外套を 賊に 盗まれた。

(三) 頼朝 義經をして 西海に 赴かしむ。

(四) 僕は 父と 花見に 行つた。

右の文例におけるが如く、二個以上の補語を要する述語もある。

㊦ (一) 正成は 忠臣 なり。

(二) 汝は 汝 たり。

(三) 歲月は 矢の 如し。

(四) 今日 は 日曜 か。

(五) 汝は 誰 ぞ。

右の文例におけるが如く、助動詞「なり」「たり」「如し」「若しくは助詞「か」「ぞ」等が述語となる場合には、その上に來る語は補語と見做す。

〔注意〕補語は、述語の性質によつて、缺くべからざる文の要素であるが、時には省略されることもある。

(一) 賢人あらば 我は(ソレヲ)師とせん。

(二) 明日 また (君ニ) 遇はう。

㊦ 補語は體言又はそれに助詞のついたものから成るのが普通である。

(一) 正成は 忠臣 なり。

(二) 猿 柿を おとす。

又、時としては、體言に準じて用ひられた用言又はそれに助

詞のついたものから成ることもある。

- (一) 氣候が暖く なつた。
- (二) 道は 近くに あり。

⑤ 補語を含んだ文は、

主語 + 補語 + 述語

の如き順序に成分を排列するのが普通だが、時にはこの順序を顛倒することもある。

- (一) 何を 君は 買ったのか。
- (二) 屋根に 草が 生えてゐる。
- (三) 祝へ 諸人 君が代を。

練習二

練習

次の文中の主語・述語・補語を指示し、且それらの語が如何なる品詞から成り立つてゐるかを言へ。

主要成分

- 一 目糞鼻くそを嗤ふ。
- 二 言はぬは言ふにまさる。
- 三 艱難汝を玉にす。
- 四 譬喩は新奇を貴ぶ。
- 五 人生は浮雲の如し。
- 六 春風長閑かに吹き渡る。
- 七 山麓に中禪寺湖がある。
- 八 來春は試験を受けむ。
- 九 燕が軒に巢をかけた。
- 一〇 紫式部は偉大なる文學者なり。

述語・述語は、如何なる文にも缺くことができず、又、補語は、述語の性質によつて缺くことができな。依つて、この三つを文の主要成分といふ。

〔三〕 修飾語

⊖ (一) 美しき花 咲きたり。

立つ鳥 跡を 濁さず。

(二) 母 泣き叫ぶ兒を すかす。

人は 萬物の靈長 だ

(三) 風 烈しく吹く。

物音が はたと絶えた。

僕は 今朝 夢を 見た。

修飾語

右の文例の中、(一)の「美しき」「立つ」はそれ／＼主語「花」「鳥」の意義を修飾限定し、(二)の「泣き叫ぶ」「萬物の」はそれ／＼補語「兒」「靈長」の意義を修飾限定し、(三)の「烈しく」「はたと」「今朝」はそれ／＼述語「吹く」「絶えた」「見た」の意義を修飾限定してゐる。かやうに、文中の主要成分の意義を修飾限定する語を修飾語と

いふ。修飾語は、主要成分の如く、文を構成するに缺くべからざる成分ではないが、あれば一層文を明確にするから、亦大切なものである。

⊖ 修飾語には、次の二種がある。

(一) 形容詞的修飾語 文中の體言を修飾するものを形容詞的修飾語といふ。随つて、主語・補語の修飾語は皆

これである。

(一) 美しい花が 咲いた。

(二) 母 泣き叫ぶ兒を 賺す。

(三) 青年は 人生の春 だ。

(二) 副詞的修飾語 文中の用言又は副詞を修飾するものを副詞的修飾語といふ。随つて、述語の修飾語は皆これである。

形容詞的修飾語

副詞的修飾語

成る。

㊦ 形容詞的修飾語は形容詞若しくは之に準ずる語から

(一) 全軍 殆ど敗る。

(二) 敵を 前後に引受ける。

(三) 我等は 更に一層勉強せん。

㊧ 副詞的修飾語は副詞若しくは之に準ずる語から成る。

(一) 黒い猫が来た。

(二) 彼は 温厚なる君子 なり。

(三) 勉強する學生は 頼もしい。

(四) 月 鏡の如き水面に 映れり。

(五) 宇宙は 永遠の謎 だ。

(六) 我が日本は 神國 なり。

(七) 彼は 社交界に於ける花形 だ。

(一) 薔薇の花は 頗る美し。

(二) 風 はげしく吹く。

(三) 我が軍 敵を 前後に受く。

(四) 今年も 夢の間に過ぎたり。

(五) 講義は 一週間で終るだらう。

(六) 學校は 八時から始まる。

(七) 天地開闢以來 君臣の分 定まれり。

(八) 松島は 風光を以て 其の名 天下に 知られたり。

(九) この点に於て 双方 意見を 異にす。

〔注意〕 補語と副詞的修飾語とは、何れも「を」「に」と「より」等の助詞を伴なふ場合があるので、二つの區別の明瞭でないことがあるから、大體において副詞的修飾語と見るべきは次の類であることを知つて

やくがよふ。

- (一) 動作の起る場所方角時間又は其の度数に關するもの。
須磨に別莊を作る。東へ流る。
- (二) 動作をする道具材料に關するもの。
十月に生る。午前八時より開催す。二回に分納す。
ペンで書く。
机は木にて作る。
- (三) 動作の方法に關するもの。
突如として來る。
何心なしに歩く。

⑤ 修飾語は普通修飾される語の直ぐ上におかれる。修飾語を含んだ文の最も簡單にして普通なる形は、

(修 + 主語) + (修 + 述語)

又は、

(修 + 主語) + (修 + 補語) + (修 + 述語)

である。

〔注意〕 副詞的修飾語は、副詞と同様に語を隔てて修飾することも多いから、注意せねばならぬ。

練習

練習三

次の文の中から主語述語補語及び修飾語を見出し、且つ修飾語は其の種類を言へ。

- 一 數かぎりない赤蜻蛉がびか／＼びか／＼飛んでゐる。
- 二 伊豆の山脈は蜿蜒としてはるかに雲煙の間に出没す。
- 三 主人の庭は竹垣を以て四角にしきられてゐる。
- 四 落日の影はゆら／＼と水の上に金を流してゐる。
- 五 健全なる精神は健全なる身体にやどる。
- 六 今日は赤城神社のも祭である。家々の軒には美しい花や提灯がさがつてゐる。

主部
述部

七 澄みきつた青空に、綿をちぎつて投げたやうな白雲が悠々と動いてゐる。

八 漫々たる大利根の水の上を、煙のやうな夕靄が遠い方からひたひたと這ひ寄つて来る。

九 我が古文學は、土から掘りだしたやうなうぶな趣と鐵のやうな強い力と花のやうな優しい美しさとを持つてゐる。

一〇 彼は書を學びて成らず、劍を學びて成らず、出でては吏となり、入つては農となり、商となりて皆成らず、遂に社會の劣敗者となれり。

文の成分は主語・補語・述語及びそれ／＼の修飾語であるが、文を更に大体に分ける時には、主語又はそれに修飾語のついた部分を主部といひ、述語又は補語・述語若しくはそれに修飾語のついた部分を述部といふ。

主語

述語

(主部)

(述部)

第二章 文の構造上の種類

修飾語 + 主語

補語 述語

修飾語 + 述語

修飾語 + 補語

修飾語 + 述語

(一) 單文

- (一) 花が 散る。
- (二) 梅の花が 盛に散る。
- (三) 犬 鶏を 追ふ。
- (四) 隣家の犬 我が家の鶏を 頻りに追ふ。
- (五) 月が 水面に 映つてゐる。
- (六) 十五夜の月が 鏡のやうな水面に 美しく映つてゐる。

單文

- (七) 子供 紙に 繪を 描きたり。
- (八) 賢き子供 白き紙に 富士山の繪を 綺麗に描きたり。

右の文例は、各、その長短は異なるが、主語と述語との關係が唯一回成り立つてゐることは何れも同じである。かやうに、主語と述語との關係が唯一回成り立つてゐる文をすべて單文といふ。

〔注意〕單文は、各成分の數の多少には關係が無い。主語や補語や述語が二個以上ある文でも、主語と述語との關係が唯一回成り立つてゐる限りは、すべて單文である。

(二) 複文

- (一) 花の美しきは 櫻なり。
- (二) 僕は 明日は 屹度晴れると 思ふ。

句 複文

- (三) 雨の降る夜は いと物寂し。
- (四) 一行は いつしか 茅薄の芒々と生ひ茂つてゐる野に 出た。
- (五) 颯の下が乾きては 誰も 難儀ならん。
- (六) 無理が通れば 道理 引っこむ。

右の文例の中、「花の美しき」「明日は屹度晴れる」「雨の降る」「茅薄の芒々と生ひ茂つてゐる」「颯の下が乾きては」「無理が通れば」は、主語述語を具へてゐることは文と同じだが、何れも文としての獨立を失つて他の文の一部を成すに止まつてゐる。かやうに、主語述語を具へてゐながら文としての獨立を失つて他の文の一部となつたものを句といふ。そして、この句を含んで且つ主語述語の關係が二回以上成り立つてゐる文をすべて複文といふ。

〔三〕重文

- (一) 花咲き 鳥啼く。
- (二) 歌ふものもあれば 踊るものもある。
- (三) 月霜の如く地に冴え 風海本の如く空に吼ゆ。
- (四) 病は口から入り 禍は口から出る。
- (五) 蝶來りて舞ひ 蟬來りて鳴き 小鳥來りて遊ぶ。

重文 節

右の文例の中、「花咲き」「歌ふものもあれば」「月霜の如く地に冴え」「病は口から入り」「蝶來りて舞ひ」「蟬來りて鳴き」は、何れも主語・述語を具へてゐながら其の獨立を失つて他の文の一部を成してゐることは句と同じだが、唯其の各の下の文と對立して意義上主従の關係の無いことは句と異なる。かやうに、句の對立せるものを節といふ。そして、この節を含んだ文をすべて重文といふ。

練習四

次の文の構造の種類を言へ。

- 一 處かはれば品かはる。
- 二 秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。
- 三 皚々たる雪は路を没し、凜冽たる風は膚を裂く。
- 四 人は神と財とに兼ね事ふること能はず。
- 五 花に歌ひ蝶に躍る幼兒もすでに自然に對する好奇心を抱いてゐる。

練習

〔注意〕 助詞「て」「ば」等で下の文に接続される時、句であるか節であるか判りにくいことがある。その時は、意味の上で區別する。

「雨降りて地固まる。」
 の「」の部分は下の文の原因理由をあらはして居るから句だ。
 「雨降りて風吹く。」
 の「」の部分は意味の上で下の文と對等だから節である。

- 六 私達は自分の魂の無限に尊いことをほんたうに自覺せねばならぬ。
- 七 智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。
- 八 人麻呂は長歌に長じ、赤人は短歌に長ず。人麻呂は善く情を抒べ、赤人は善く景を叙す。
- 九 死は生きとし生けるものゝ免るべからざる運命なり。
- 一〇 蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟す。
- 一一 紫苑も咲いて居れば、女郎花も咲いてゐる。
- 一二 家の前を流れてゐる小川には、小鮎が躍つてゐる。
- 一三 家を捨て、富を捨て、官位を捨て、素つ裸の人間となつた時は、じめて眞人間の姿があらはれる。

文の解剖

文を主部・述部に分ち、其の二部分を更に各成分に分解し、且つ其の文の構造上の種類を明かにすることを文の解剖と

いふ。

復習

- 一 次の文を解剖せよ。
昨日は東に走り、今日は西に走る。
子供は餘念なく、麩を追ふ池の鯉魚を見守る。
道端の木槿は馬に食はれけり。
鳥は吾能くその高く飛ぶを知る。
- 二 次の文中の——線のある部分は如何なる成分か、又述語ならば其の主語を、修飾語ならば其の修飾の範圍をも言へ。
遠山寺の入相の鐘、時に歸る夕鳥もいつしか聲しづまりて對へる
文卷もやうやう見えすなりゆくに、心ゆくわたりはいと口惜しきものから、暫しうちおきて、端の方に出づれば、暮れ残る梢どもほの
かなる山の端に、僅かにあらはれたる三日月の影こそいとをかし
けれ。青鷺とかやいへる鳥のあやしき聲になきゆくが、何となく

物淋しげなるを來むといひつる友はた暮れすぐしてやと思ふも
心もとなきに燈火かゝげたるこそ先づ嬉しけれ。

(中島廣足檀園文集)

第三章 文の呼應附係結

○ 文はすべて前後の語句が相應じて全体として纏まつて居らねばならぬ。例へば、

人誰か死せざるものあらん

といふ文では、上の「誰か」に對して下に必ず「あらん」といひ「あり」などとは決して言はない。これを文の呼應といふ。文の呼應には種々の場合がある。

文の呼應

(一) 主語述語補語の呼應

(正) 日本で一番高い山は、駿河の富士山である。

(誤) 日本で一番高い山は、駿河の富士山が一番高い。

(正) 彼は帝都を復興するに與つて力ありし人なり。

(誤) 彼は帝都を復興に與つて力ありし人なり。

(二) 反語の呼應

(正) 天下いづれの日にか定まらん。

(誤) 天下いづれの日にか定まらず。

(正) 忍耐の心なくば如何でか其の目的を達し得ん。

(誤) 忍耐の心なくば如何でか其の目的を達し得ざらん。

(三) 副詞の呼應

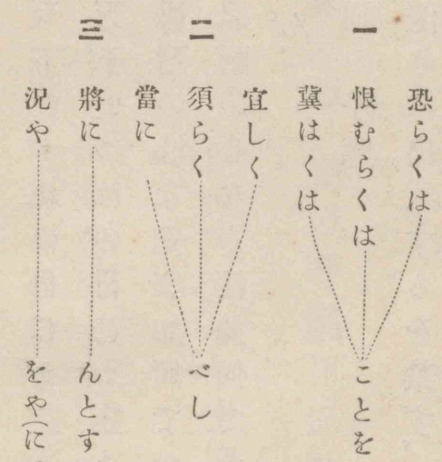
(正) 濫りに出入するを禁ず。

(誤) 濫りに出入を禁ず。

(正) かゝる失敗は蓋し時期を誤りし故ならん。

(誤) かゝる失敗は蓋し時期を誤りし故なり。

〔注意〕 副詞には次の如き特殊の呼應をなすものも多い。



係結
係詞

① 文の上部に助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」がある時には、それを受ける用言助動詞はすべて連体形を以て結び、助詞「こそ」がある時には、已然形を以て結ぶ。これを係結カケリムスビといふ。そして、この場合「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」を係詞カケリコト、これを受けて文を結

結詞

ぶ用言助動詞を結詞ムスビコトといふ。

- (一) 家ぞ榮ゆる。 花ぞ咲きける。
- (二) 家なむ榮ゆる。 花なむ咲きける。
- (三) 春やとき、花や遅き。 月やあらぬ。
- (四) 誰かある。 幾世か經し。
- (五) 家こそ榮ゆれ。 花こそ咲きけれ。

〔注意〕 句になつてゐる場合の係詞は下の結詞に影響しない。

珍しき春も明日とぞ聞ゆれば暮れなむ年を何か惜しまむ。

又感動の助詞で結ぶ場合にも係詞の影響を受けない。

この人数船なればこそ涼みかな。

又結詞の省略される場合も多い。

名を天下に揚げたりとぞ(イフ)

感ずべきことにこそ(アレ)

又口語では、「ぞ」「なむ」「や」「か」の係詞は用ひない、「こそ」は用ひるが特

定の結詞はない。

〔注意〕

係詞に對して結ぶべき語はその述語である。故に、他の所で結ばぬやう注意せねばならぬ。

(正) 貧しきこそ幸なれと思ひたり。

(誤) 貧しきこそ幸なりと思ひたれ。

練習五

練習

一 次の文に誤あらば正せ。

- (イ) 櫻は散るさまこそ最も愛すべき。
- (ロ) よくこそ我はこゝに來つる。何ぞ來ることの甚だ遅かりき。
- (ハ) 人誰かその身の幸福を希はざる者なからんや。
- (ニ) あゝ、燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知ることを得ず。
- (ホ) 況んや大業を成就せんとする者ならんや。
- (ヘ) 思はざりき、今日君と旗鼓の間に相見ゆることの珍しさよ。
- (ト) 人は須らく芳名を千載に傳へんことをこそ期すべきなり。

(チ) 渚に寄する波の音袂にやどる月の影、いづれか心を傷ましめず。

(リ) 熱海にくらしし三月のみこそ如何ばかり長く覚えしか。

(ヌ) それで昔からも言つてゐます通り、公共心は國家、社會成立の基礎

だと言つてゐます。

(ル) 貧家に生れたるこそ幸なりと古の聖人も言はれたれ。

(ワ) 教育の普及を計つて、今後の世界的競争に負けない國民を養成に

努めねばならぬ。

(カ) 生きとし生ける者、誰かその生命を愛せざるものあらんや。

(イ) この川に沿ふて行かば、寺の前に出づべし。その隣の家ぞ君の訪

ぬる家なり、と教へたる。

二 次の文を解釋せよ。

(イ) あはれ、世は如何にもなりなむ、唯力を尽し忠を勵みても尙及ばざらむ時、かねて亡き身のせむすべなからめや。さるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を未來に祈願せ(る)こそ心得ね。(高山樗牛)

(ロ) こゝには大納言殿のところをおはせしか、この妻戸をばかくこそ出で入りし給ひしか、あの木をば自らこそ植ゑ給ひしかと、唯父のことのみ戀しげにこそ宣ひけれ。(平家物語)

新撰國文法終

附錄 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ
 - 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
 - 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ
- 例
- 火災ハ二時間ノ長キニ亘リテ鎮火セザリシ
 - 金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ
 - 四 「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリ」ヲ「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ
 - 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 例
- ナシ
- 手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「、セラル」トイフベキ場合ニ、「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從

フモ妨ナシ

例

罪サル

評サル

解釋サル

七「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナ

「ドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドスルモ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九 てにをはノ「ハ」動詞助動詞ノ連体言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例

花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例

有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

二 てにをはノ「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續ス

ル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラルルトモ

強ヒテ之ヲ尊奉セシムルトモ

三 てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ

嘲弄セララルト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ

三 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎へ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハシ

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

五 てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「ト」モ或ハ「ド」モノ如ク用キルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカトモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ
誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ
給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

二 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナ

例

イハユル哺乳獸ナルモノ
顔回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラル、モノハ徳川時代國學者ノ研
究ニ基キテ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リ
テ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ

コレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ
認め得ベキモノナシトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラ
レタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並
行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審
議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編
纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

第一表

動詞活用表

下二段活用	用 活 段 二 下	
(蹴)	植流覺褒比敷尋出捨交馳告避(得)	(居)
け	忍れえめべへねでてせせげけえ	忍
け	忍れえめべへねでてせせげけえ	忍
ける	うるゆむぶふぬづつすすぐくう	忍
ける	うるゝるるるるるるるるるるる	忍
けれ	うるゆむぶふぬづつすすぐくう れれれれれれれれれれれれれれれ	忍
け	忍れえめべへねでてせせげけえ	忍
	用 活 段 一 下	
(蹴)	植流覺褒比敷尋(出)捨交馳告避(得)	(居)
け	忍れえめべへねでてせせげけえ	忍
け	忍れえめべへねでてせせげけえ	忍
ける	忍れるるるるるるるるるるるるる	忍
ける	忍れるるるるるるるるるるるるる	忍
けれ	忍れれれれれれれれれれれれれれれ	忍
け	忍れえめべへねでてせせげけえ	忍

第一表

動詞活用表

用活段二下		用活段一上	用活段二上	さ行變格	か行變格	な行變格	ら行變格	用活段四	種用の類	文
植流覺褒比敷尋出捨交馳告避(得)	(居)(射)(見)(干)(煮)(着)	懲報試延用恥朽過生	(爲)(來) 死 有	釣積飛思育押漕書	語根					
忍れえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	せこ	なら	らまばはたさがか	未然				活
忍れえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	しき	にり	りみびひちしぎき	連用				
うるゆむぶふぬづつすすぐくう	ゐいるみるひるきる	るゆむぶふづつぐく	すくぬり	るむぶふつすぐく	終止					用
うるゆむぶふぬづつすすぐくう	ゐいるみるひるきる	るゆむぶふづつぐく	するくるぬる	るむぶふつすぐく	連體					
うるゆむぶふぬづつすすぐくう	ゐいみひにき	るゆむぶふづつぐく	すくれぬれ	れめべへてせげけ	已然					形
忍れえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	せこねれ	れめべへてせげけ	命令					
用活段一下	用活段一上	用活段四	さ行變格	か行變格	種用の類	口				
植流覺褒比敷尋(出捨交馳告避(得)	(居)(射)(見)(干)(煮)(着) 懲報試延用恥朽過生	(爲)(來) 死 有 釣積飛思育押漕書	語根							
忍れえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	しせ	こ	なら	未然				
忍れえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	しき	にり	りみびひちしぎき	連用				
うるえめるへるねでてるせるげるえる	ゐいるみるひるきる	りいるみるひるちるきる	するくるぬる	るむぶふつすぐく	終止					
うるえめるへるねでてるせるげるえる	ゐいるみるひるきる	りいるみるひるちるきる	するくるぬる	るむぶふつすぐく	連體					
忍れえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	すくれぬれ	ねれ	れめべへてせげけ	已然				
忍れえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	しせ	こ	ねれ	れめべへてせげけ	命令			

動詞活用表

下二段活用	用活段二下		用活段一上		用活段二上		さ行變格	か行變格	な行變格	ら行變格	用活段四		種 類	活 用の
	用活段二下		用活段一上		用活段二上						用活段四			
(蹴)	植流覺褒比教尋出捨交馳告避(得)	(居)(射)(見)(干)(煮)(着)	懲報試延用恥朽過生	(爲)(來)	死	有	釣積飛思育押漕書	語根	文					
け	ゑれえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	せ	こ	なら	らまばはたさがか	未然	活 用					
け	ゑれえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	し	き	にり	りみびひちしぎき	連用						
ける	うるゆむぶふぬづつすすぐくう	ゐるみるひにきる	るゆむぶふづつぐく	す	く	ぬり	るむぶふつすぐく	終止						
ける	うるゝるるるるるるるるる	ゐるみるひにきる	るゆむぶふづつぐく	する	くる	ぬる	るむぶふつすぐく	連體						
けれ	うれれれれれれれれれれれ	ゐいみひにき	るゆむぶふづつぐくれ	すれ	くれ	ぬれ	れめべへてせげけ	已然	形					
け	ゑれえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	せ	こ	ねれ	れめべへてせげけ	命令						
	用活段一下		用活段一上		さ行變格	か行變格	用活段四		種 類	活 用の				
	用活段一下		用活段一上				用活段四							
(蹴)	植流覺褒比教尋(出)捨交馳告避(得)	(居)(射)(見)(干)(煮)(着)	懲報試延用恥朽過生	(爲)(來)	死	有	釣積飛思育押漕書	語根	口					
け	ゑれえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	し	こ	なら	らまばはたさがか	未然	活 用					
け	ゑれえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	し	き	にり	りみびひちしぎき	連用						
ける	ゑれるるるるるるるるるるる	ゐるみるひにきる	りいみるひぢぢぎきる	する	くる	ぬる	るむぶふつすぐく	終止						
ける	ゑれるるるるるるるるるるる	ゐるみるひにきる	りいみるひぢぢぎきる	する	くる	ぬる	るむぶふつすぐく	連體						
けれ	うれれれれれれれれれれれ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	すれ	くれ	ねれ	れめべへてせげけ	已然	形					
け	ゑれえめべへねでてせせげけえ	ゐいみひにき	りいみびひぢぢぎき	し	こ	ねれ	れめべへてせげけ	命令						

第二表

形容詞活用表			文		語		口	
美	清		未然	連用	終止	連體	已然	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	
美しく	く		く	く	し	し	しけれ	

第三表

形容動詞活用表			未然		連用		終止		連體		已然		命令	
堂々	静	善	から	かり	かり	かり	かる	かる	かれ	かれ	かれ	かれ	かれ	かれ
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た

助動詞活用表

種類	受身	使役	打消	時	希望	推	量	詠歎	指定	比況	文		語		口	
											本形	未然	連用	終止	連體	已然
	らる	しらす	じざり	たりぬつきむ	たらし	めらむ	べかし	なり	なり	し	く	く	く	く	く	く
	れ	めせ	ざり	ら(ら)なて	く	〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	れ	めせ	ざり	り(り)にて	く	〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	る	むす	じざる	りりぬつきむ	し	らむ	し	なり	り	し	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	る	する	じざぬ	るぬつるしむ	き	めむ	き	なる	る	き	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	る	すれ	じざぬ	れぬつれしかめ	けれ	めめ	けれ	なれ	れ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	れ	せ	しめ	〇〇ねて	〇	〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	れる	せる	させる	た	たい	らしい	まい	だ	です							
	れ	せ	なく	たら	〇	〇	〇	だ	でせ							
	れ	せ	なく	〇	たく	〇	〇	だ	でし							
	れる	せる	ぬ(ん)	た	たい	らしい	まい	だ	です							
	れる	せる	ぬ(ん)	た	たい	らしい	まい	〇	〇							
	れ	せ	なけれ	〇	たけれ	〇	〇	〇	〇							
	れ	せ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇							

第四表



新撰國文法

大正十五年十月二十日
昭和二年二月十一日訂正再版發行
昭和五年十月二十五日訂正再版發行

定價金四拾參錢
昭和五年度
臨時定價金七拾錢

編者 永井一孝

發行者 宮部富三郎

印刷者 稻田廣吉

印刷所 文宏社印刷所

東京市神田區西紅梅町十三番地

東京市本郷區湯島四丁目三番地

東京市本郷區湯島四丁目三番地

發行所

東京市神田區西紅梅町十三番地
振替口座東京五三二二九九番

斯文書院

繪圖表

總發行所

卷二 終

卷三 終

A large grid of tables on the right page, containing various columns of text and numbers, likely a detailed index or a list of items. The text is very faint and difficult to read, but the structure is clearly a multi-column table.

山
12

東
山
山



広島大学図書

2000038331

